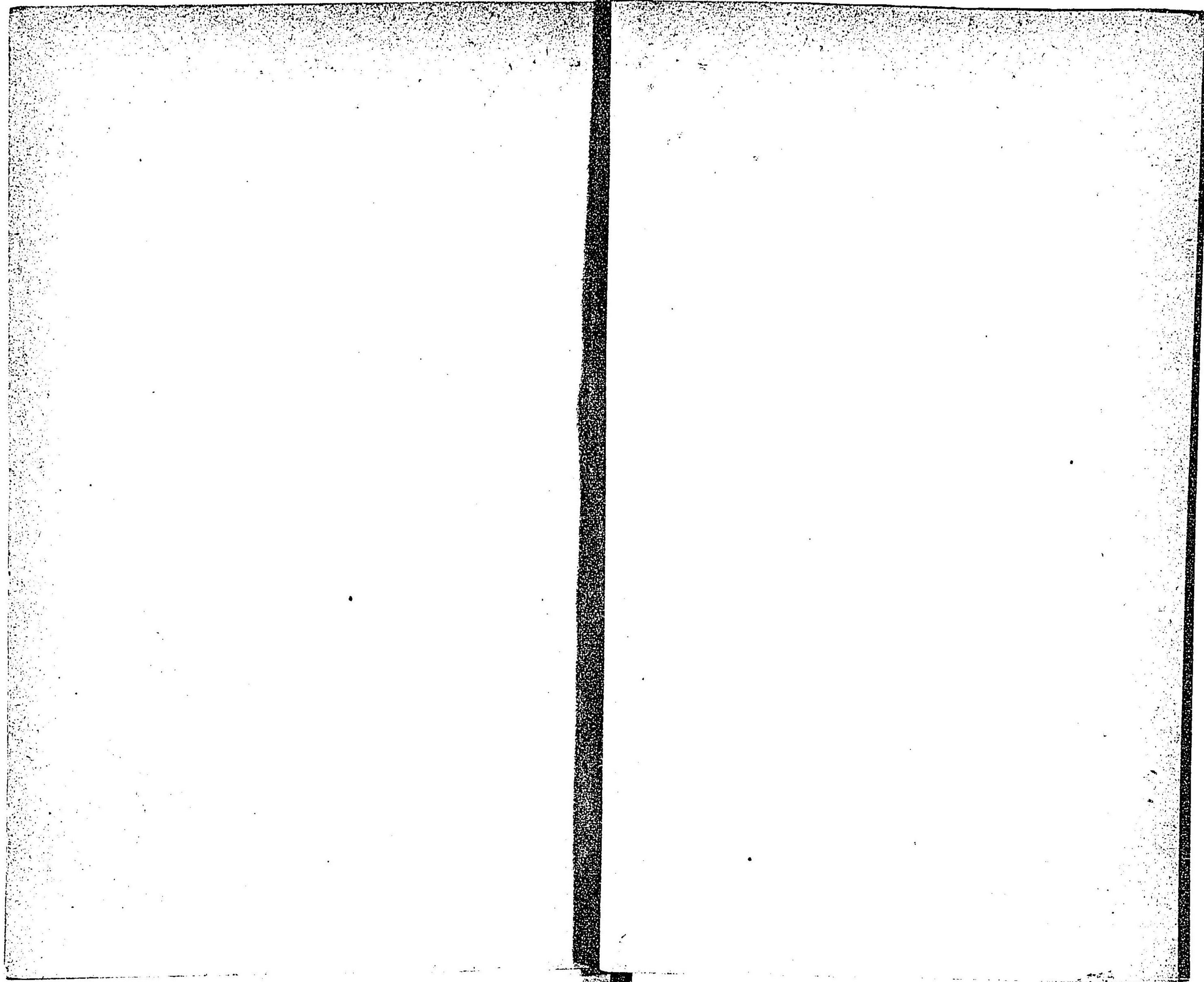


325  
112

矢島宇吉著

# 純福音一斑

東京 警 醒 社 書 店



325-112



純福

音

一

斑

純福音社  
發行

明治  
43. 5. 7  
寄贈

## 自序

現今の基督教界は實に紛雜を極む。其の成文たると否とを問はず、特種の人工的信仰個條、規則、儀式、習慣等を有する教派甚だ多し。彼の道を求めんとする人々にして、此の雜然たる状態を觀望せんか、其の適從する所を知らざるが爲めに、可惜初念を斷つ者蓋し少なからざる可し。又た彼の或る時期間教派に屬せし人々にして、其の内情を詳にし、聖書の教に適はざる多くの事の行はるゝを見るに及んでは、自ら嫌厭の情を催さざるを得ざる可し。

予輩、去る明治四十一年八月以來、一には教派の誤謬を明かにし、一には純福音の何たるかを説き、人をしてキリストの完全なる救に預ることを得せしめんとするの目的を以て、神の佑助の下に、毎月一回「純福音」と稱する小雑誌を發行しつゝあり。本書中收むる所の諸篇は、即ち一度同紙上に掲載したるもの也。今これ編輯して一冊子と爲すも、諸篇の間に整然たる秩序脈絡あるに非ず、時に論説の重複する所ありと雖も、兎も角も之に由つて純福音の一斑を示し得べしと信ず。本書が幸にして誠實なる讀者の眞光明に導かるゝ端

緒たらんことは、予輩の切に祈る所なり。

明治四十三年三月二十五日

城南大井町純福音社に於て

著者識

純福音一斑

目次

眞正の宗教改革	一
神之教會の組織	一三
神之教會は宗派に非ず	二一
聖なる教會	三〇
新約の禮典	三七
信徒の一致	五四
同盟と一致	六四

目次	二
教役者の生計	六八
俸給制度の弊害	七三
窄き門	八〇
宗派雑説	八七
宗派の辯護に資するが如く見ゆる聖句	九七
辯解	一一一
聖書は神の言なり	一二〇
如何にして救はるべき乎	一二八
聖潔の教義	一三六
何故病に罹る乎	一四六

神癒	一五三
神癒を否定するが如く見ゆる聖句	一六二
人の現在及び未來	一七三
安息日と主の日	一八七
基督の王國	一九六
基督の再臨	二〇六

附録

米國に基督の教會ありや	一
人生の煩悶	一四
目次	三

教界小言

- (一) 神學書と聖書……………二二
- (二) 新教及び神學博士……………二五
- (三) 宗派間の競争……………三一
- (四) 聖徒と教派……………三四

目次畢

純福音一斑

矢島宇吉著

真正の宗教改革

吾人、宗教改革なる一語を耳にするや、思念は直に馳せて第十六世紀の昔に遡り、當時の巨人マルチン・ルーテルを想見するを常とす。然り、ルーテルは實に宗教改革者にてありき。蓋し真正の基督教は全く暗雲の蔽ふ所となり、法王及び其の從者の背教専横至らざるなき時に當つて、彼は眞向より之を批難し攻撃し、大に改悛せしむる所ありしと同時に、斯教の眞面目を發揮せしめたる點鮮からざれば

真正の宗教改革



なり。然れども其の改革や到底不完全たるを免れざりしが故に、後世幾多の分裂を生じ、各々勝手に旗幟を押立て、以て互に排擠し競争し嫉視するの結果、甚だしき混乱に陥り、誤謬を招き、俗臭を迎ふることとはなれり。今時地球の表面に存在する幾百の基督教分派の實状を察する者は、此の忌はしき事實を認めざることを能はざる可し、是に於てか天を仰ぎて歎息しつゝ、更に完全なる宗教改革の現出を翹望する者、漸く其の數を加ふるに至れり。

按ずれば千八百八十年頃の事なりき、彼の米國に於て、眞に神の靈に導かれ、聖書の基督教其のものを宣傳する者此處彼處に起りしが、之を聽きて信ぜし者は、完全なる救の實驗を得、以て結合せし聖徒等の間には、猜疑もなく嫉視もなく随つて分裂もなく、「みな一になり」「みな言ふことを同うし」、茲に使徒時代に於けるが如き、唯

一にして眞正なる神の教會を見ることとはなれり。是れ即ち現今非常なる勢を以て發展しつゝある改革運動の端緒なりとす。

從來の基督教は、銘々の考に任せて、勝手に取捨添削せる基督教なり。聖書の示す洗禮は、即ち全身を水に浸すことなるにも拘はらず、或者は單に頭に水をくぐぐ也、小兒に洗禮を施すことは、嘗て聖書の教へざる所なるにも拘はらず、或者は之を行ふ也。神癒を信ずべきことは、聖書の明かに教ふる所なるにも拘はらず、奇蹟の時代は既に過ぎ去り、科學時代來りとなして之を信ぜず、隨つて「耶穌基督は昨日も今日も永遠變らざる」ことを信ぜざる也。或者は既に除かれたる舊約の律法に拘泥し、今日も尙ほ之を嚴守すべきかか如く唱ふる也。互に足を洗ふことは、晚餐禮と同じく聖徒の行ふべき禮典として、基督その例を示し給ひしにも拘はらず、嘗つて之を

行はざる也。「爾曹はラビの稱を受くること勿れ、そは爾曹の師は一  
人すなはち基督なり、爾曹は皆兄弟なり」と教へられたるにも拘は  
らず、或は神學博士の肩書を誇り、或はレベレンドの尊稱を喜び、  
或は自ら大將となりて所謂兵士に命令する也。此等は幾十年幾百年  
に亘る普通の習慣たるが爲めに、吾人之を怪まずして過ぎ來りしも  
若し嚴密に之に就て思考せば、其の背違の甚だしきに驚かざるを得  
ざる可し。基督曰く、「我を呼びて主よ主よと曰ふもの盡く天國に入  
るに非ず、唯だ之に入る者は我が天に在す父の旨に遵ふ者のみ也。  
其の日我に語りて、主よ主よ主の名によりて教へ、主の名によりて  
鬼をおひ、主の名によりて多くの異能をなし、に非ずやと云ふ者多  
からん、其の時彼等に告げ、我曾つて爾曹を知らず、惡をなす者よ  
我を離れ去れと曰はん」と。以て知る可し、恭しく儀式を行ひ、聲

高らかに祈禱を捧げ、雄辯を振つて説教し、數多の註釋に基きて聖  
書を講じ、或は慈善事業を營み、或は外國傳道に従事せる人々と雖  
も、主より「我曾つて爾曹を知らず、惡をなす者よ我を離れ去れ」  
と曰はるゝ者あらんことを。

予輩は茲に、明治四十年六月初旬、米國インデアナ州アンダソン  
市に於て開かれたる神の教會の天幕集會に出席せし當時の所感を一  
言するを禁ずる能はず。會は十日間續きしものにて、日々出席者  
は凡そ千五百人なりき。午前午後に涉りて數回の會合あり。凡て唯  
だ時間の定めあるの外、別に豫定の司會者も無く、説教者も無し。  
開會の際に當つて何人か讚美歌第何番と告ぐるや、會衆一齊に之を  
歌ひ出し（オルガン、ピアノ等の如き樂器を一切用ゐず）、歌ひ終り  
て何人か祈りはじむるや、一同跪き心情を以て之に和す、次で何人

か随意に講壇に現はれて説教すると云ふ次第なり。斯くて説教終るや思ひくりに散じ去るもあれば講壇の前に進み出で、痛哭しつゝ罪を懺悔し、教師等に共に祈らんことを求むるもあり、又た神癒を受けんが爲めに長老等の祈禱を乞ふもあり。其の間さらに管々しき執行順序も無く、又た儀式も無し。而かも整然として曾つて亂れず、莊重端嚴、完全なる調和の中に敬虔充ち熱誠溢るゝ也。其の高尙にして雅美なること眞に言語に絶す。且つ又た、華美を競ふ米國の習慣として、男子は麗しきチクタイを用ゐ、女子は胸間に金時計をぶら下げる事なるが、聖徒等の間には全く斯る虚飾の風なし。而かも心中に平和あり満足あり喜悅ある者の常として、おのづから温平たる容貌を具へ、人をして親ましめ、又た人に親むが故に、聖徒等の集合の中には、文字通りに、霽々たる和氣充滿し、互に言ふべからざる慰安歡樂を覺ゆる也。

ざる慰安歡樂を覺ゆる也。

來集者中教役者百八十餘名あり、其の中四十餘名は婦人なりき。單に教役者のみの會合も數回催されしが、是れ亦た各派の教役者等の會合とは著しく異なるものなり。即ち彼等の會合には、大抵それぞれ肩書を有する二三の大立物ありて、豫め定められたる順序に従ひ、或は司會し、或は講演することなるが、此等の人物あまり大なるが爲めに、基督は其の後に押し匿され、會衆は此所謂大人物のみを見て、主なる基督を見ること能はざるが常なるに、此の教役者會に於ては、基督は中央に立たせ給ひ、他は悉く其の足下に俯伏し謙りて祈り、謹んで語るの狀あり、素より世俗的に言へば、此の中所謂大人物も少なからず、學者もあり、詩人もあり、著述家もあり、雄辯家もあり。而かも彼等は敢て大人物らしく氣取りもせず、會衆

も亦これを大人物として特別の尊敬を拂ひもせず、大も小も唯だ與へられたる力量に従ひ、主に事ふる僕たりとの觀念に充たされ、榮譽は悉く之を主に歸し、各々兄弟姉妹として相助け相愛するの外さうに餘念なきなり。且つ又た、各派の教役者會に於ては、博士某と先輩某との間に意見の衝突を來し、會衆も亦た賛否二派に分れ兩者の間に感情の融和を缺くが如き事あるは、敢て珍らしからざれども此の教役者會に於ては、斯る忌はしき形跡寸毫あるなし。一人立て語る時は他は悉くアイメンと唱へて之に同ずるのみ。而して各自の語る所は、單に頭腦の中にて案出せられ組織せられしものに非ず、深き内心の實驗より湧き出るものなるが故に、聽く人々の肺腑に徹し、彼等をして此の世の智慧ならざる神の智慧を學ばしめ、益を與ふること甚大なり。其の他何れの點より見るも、彼と此との差異は、

實に雲泥も霄ならずとす。

第十六世紀の宗教改革の發端たるや、霹靂一聲、天地を振動せしむるの概ありしも、此の宗教改革の初發たるや、大に之と趣を異にし、頗る微少にして、一時に世人の注意を惹くが如きこと莫かりし故に、これを全世界に於ける一大宗教改革の端緒たるに心附かず、或は先入主となれる偏見に欺かれ、輕々に看過し去る者世に多し。嗚呼、其の實質の何たるかを究めずして、忽ち之を放棄する者は禍なる哉。予輩は我が同胞が決して此の種の人たらずして、兎にも角にも先づ之に就て熟考せられ、研究せられ、以て「藏れたる寶」「價たかさ眞珠」を見出されんことを切望して止まざる也。

終りに臨み、所謂聖潔派の諸團體に就て一言するの要あるを覺ゆ此等は素より不完全なるものにして、從來の所謂教會と同じく、幾

多の分派團體を形成し、種々なる醜態を演出しつゝあり。曾て中田重治氏の世界巡禮記なるもの「煽の舌」と稱する雑誌に掲載されたりしが、明治四十年三月十日米國オハヨー州シンシナタ市よりの通信中に曰く「エバンヂリストもリバイバルを受負事業の如く心得、十日間百弗乃至千弗と云ふ相場で興行して居ります。救霊事業もかく安つばくなつては抑も末であります。純福音を説く聖潔の傳道者は、斯る事に大反對をなして起つたものであるけれども、名高くなると危険なるもので、彼等の或者でさへ十日間幾何弗と豫め相談するやうであります。イヤ實に嫌な事であります。……モ、一つ嫌な事は、聖潔を説く傳道者中に自任の頭領株が澤山ある事であります。銘々勝手に陣立をなし、城砦を築いてやつて居ります。それもよいが互に批評し合ひ他人の欠點のみを拾ひ上げ騒いで居ります。彼等

の或者は掃溜をあさり歩く犬の類であります。腐れ玉子や魚の腸を喰ふて喜んで居ります。聖潔の傳道者と名乗つて來ても、ウツカリ氣をゆるされぬのは米國であります」と。之に由て略ぼ其の内情如何を察知することを得べし。

今試みに該團體の二三の名を挙げればペンテコスト、バンド（インデアナ州インデアナポリス市）ゴツヅ、リバイバリスト（オハヨー州シンシナタ市。中田氏の記する所によれば此は淀橋の聖書學院と淺からぬ關係ある由）。バーニング、ブツシユ（ウイスコンシン州ウヲーカシヤ市）カリホルニヤ、ホリチス（カリホルニア州ロスアンゼルス市）等なり。素より此の外にも澤山ありて枚擧するに堪へず。而かのみならず。更に新なる團體も次第に設けられつゝあるなり。其の實證として、又た中田氏通信中の一節を引かん、「ナザレ人

の教會と申すのが新に起りし聖潔の團體で、米國の各所にありて純福音を説いて居ります。シカゴにある其の一に出席しましたが實に充たされて居ります、かゝる聖徒に遇ふて惠の空氣を呼吸するから御蔭で靈魂が養はれ、巡禮に來た甲斐があるやうに思はれ感謝して居ります」と。此に「實に充たされて居ります」との一句あれども果して何が充たされて居ることなるか、予輩には之を解すること能はざる也。

之を要するに、聖潔の教義を説き、神癒の信すべきを教へ、基督の再來を待ち望めばとて、之を以て直に純福音となし、之に由て完全なる救の實驗を得らるゝかの如く稱ふるは、實に誤謬の甚だしきものとす。

イ太七〇廿一—廿三

### 神之教會の組織

神之教會は完全なる一個の組織團體なり、故に素より其の成立に必要なる下の諸條件を具備す。

(一) 組織者 紀元卅二年、カイザリヤ、ピリビに於て、基督はペテロに告げたまはく「爾はペテロなり、我が教會を此の磐の上に建つべし、陰府の門は之に勝つべからず」と。是れ教會を組織する者は實に基督御自身なることを示すものに非ずや。其の後紀元六十四年、パウロがエベソ人に送りたる書中に曰く「爾曹はもはや外國人また寄寓人に非ず、聖徒等と同國民にして神の家の方なれば、使徒等及び豫言者等の基礎の上に建てられたるものなり、而してキリスト、イエス自ら其の隅の首石となり、全家彼に於てよく組合ひ

彌増して主の聖き宮となるなり、其の中に爾曹も共に建てられ、靈に由りて神の住み給ふ處となり」(バプテスマ譯)と。此の中の「家」又は「宮」は即ち教會にして、此の時は既に基督に由りて組織せられたるなり。見る可し、眞正の意味に於ける教會は、今日の羅馬教會、希臘教會、及び新教諸派の未だ世に現はれざりし遙か前に、既に完成せしものなることを。而して「陰府の門は之に勝つべからず」と基督の宣はれしが如く其の教會は今日も尙ほ存在する也。

(二) 會員 基督の組織し給ひたる教會に會員を加ふる者は、基督御自身の外に無し、故に曰く「主すくはるゝ者を日々教會に加へ給へり」と。キリストは宣はく「我は門なり、若し人われより入らば救はれ、且つ出入をなして草を得べし」と。然らば則ち會員とは畢竟、救はれたる者の謂にして、其の他に何の意義をも含まざるこ

とを知る可し。而して我等救はれんが爲めには、聖書の教ふる所に従ひ、凡て其の必要な條件を果す可きなり。

(三) 役員 バウロはローマ人に與へし書中に於て曰く「然れば賜はる所の恩によりて各々賜を異にせり、或は預言あらば信仰の量に循ひて預言をなし、或は役事あらば其の役事をなし、或は教誨をなす者は教誨をなし、勸慰をなす者は勸慰をなし、施しをなす者は吝なく施し、理治をなす者は懈らず治め、矜恤をなす者は歡びて憐むべし」と。又たコリント人に與へし書中に於て曰く「賜は殊なれども靈は同じ、職は殊なれども主は同じ、また行爲は殊なれども一切の事を凡ての人の中に行ふ神は同じ、靈の顯を各人に賜ひしは益を得しめん爲めなり、或は靈によりて智慧の言を賜はり、或は同じ靈によりて智識の言を賜はり、或は同じ靈によりて信仰を賜はり、或

は同じ靈によりて病を醫す能を賜はり、或は異能を行ひ、或は預言し、或は靈を辨へ、或は方言をいひ、或は方言を譯するの能を賜はれり、然れど凡て此等の事を行ふ者は同じく一靈なり、彼その心のまゝに各人に頒與ふるなり」と。又たエペソ人に與へし書中に於て曰く、「その賜ひし所は使徒あり、預言者あり、傳道者あり、牧師あり、教師あり」と。又た彼がエルサレムに上らんとする途上、ミレトスよりエペソに使を遣はして長老等を招きし時、彼等に告げて曰く、「爾曹が聖靈に立てられて監督となれる其の全群を慎み、主の己が血をもて買ひ給ひし所の教會を牧ふべし」と。見る可し、教會の中の役員は、人の任命や撰擧に由つて定めらるゝに非ずして、全く神の立て給ふものなることを。而して教會は唯だ何人が何の職務に任ぜられしかを知り、必要と認むる場合に於て之に按手するに過ぎ

ず、此の事に關してパウロはテモテに告げて曰く、「輕易しく人に按手する勿れ」と。又た曰く、「此を先づ試みて責むべき所なくば執事の職に當つべし」と。

教會の役員に數多の種類あることは、上に引きたる所によりて知る可し。而して各地方に必ずしも凡ての役員を要するに非ず、神は其の時と場所の事情に應じて必要なる役員を立て給ふ也。

(四) 名簿 素より紙と糸とを以て造り、人の手にて記入せらるべきものに非ず。然らば何ぞ。下の聖句は即ち之れを示さん、曰く「惡鬼の爾曹に服し、事は喜びとする勿れ、爾曹が名の天に録されしを喜びとすべし」と。又た曰く「我が眞の侶よ、請ふ此の二人の婦等を助けよ……彼等の名は生命の書に録されある也」と。

(五) 訓練 神學書に頼らず、信仰個條に頼らず、唯だ「聖書は



爾をしてキリスト、イエスを信ずるに因りて救を得しめん爲めに智慧を與ふるもの也、聖書はみな神の默示にして、教誨と督責また人をして道に歸せしめ、又た義を學ばしむるに益あり、これ神の人の完全を得て諸の善事を行ふに缺なからん爲めなり」と。以て神學校などの要なきを知る可し。

(六) 一致 完全なる組織團體に分裂のあるべき理由なし。一體は一にして多くの肢あり、一體の凡ての肢は多けれども一の體なり、キリストも亦たかくの如し、或はユダヤ人、或はギリシヤ人、或は奴隸、或は自主に拘はらず、我等みな一靈に在りてバプテスマを受け一の體となり、又た一の靈を飲めり……肢は多くあれども體は一なり」キリストの體すなはち教會」の調和一致を保つ情態は恰かも人體の其れの如し。人體には耳目鼻口兩手兩足等の肢ありと雖も

悉く意志(即ち首)の命ずる所に従つて動く也。夫れ神は「キリストを一切の者の上に首となし、此を教會に賜ひて其首と爲せり」されば基督に屬する各個人は、全く基督に服従して動き、其の間に完全なる調和一致を保つべき也。

(七) 名稱 名稱は常に其の實に應じて附せらる(時に僭冒なきに非ざれども)故に神之教會ならざる他の名稱を有するものは、即ち其が神之教會に非ざることを表示する也。

聖書に於ける教會は即ち神之教會なり。故にパウロは曰く「書をコリントにある神の教會即ちキリスト、イエスに在りて潔められ、召されて聖徒となれる者、および彼等の處にも我等の處にも凡ての處に於て、我儕の主イエス、キリストの名を呼ぶ者にまで贈る」と又た曰く「ユダヤ人をもギリシヤ人をも亦た神の教會をも礙かする

勿れ」と。又た曰く「そは我れ神之教會を迫害し、故に使徒と稱ふるに足らざる者にして、使徒の中にて至微者なれば也」と。又た曰く「我が曩にユダヤ教に在りし時行ひたる事を爾曹聞けり、即ち甚だしく神之教會を迫め且つ之を殘賊せり」と。又た曰く「人もし自己の家を理るとを知らずば如何にして神之教會を管るとを得んや」と。上來記する所によりて知る如く、神之教會の組織は實に完全なり信仰を有する者の眼より見れば、人の手加減を施す可き餘地全く無し。

イ太十六〇十八  
ニ約十〇九  
ト弗四〇十一  
又提前三〇十  
又提後三〇十五—十七  
タ弗一〇廿二  
ツ哥前十五〇九

ロ弗二〇十九—廿二  
ホ羅十二〇六一—八  
チ徒廿〇廿八  
ル路十〇廿  
カ哥前十二〇十二、十三、廿  
レ哥前一〇一  
子加一〇十三

ハ徒二〇四八  
ヘ哥前十二〇四—十一  
リ提前五〇廿二  
チ腓四〇三  
ヨ西一〇廿四  
ソ哥前十〇廿二  
ナ提前三〇五

### 神之教會は宗派に非ず

世人の多くは以爲へらく、今日宗派を攻撃しつゝある神之教會も畢竟一の宗派にして、年月を経るに従ひ、現在の諸宗派と同種類の團體を形成するものならんと、斯く考ふるも一應無理ならぬ事情あり、蓋し或宗派の如きは、其の最初に於て、頻りに無宗派を主張せしが如く、神之教會も畢竟之と同一の徑路を踏みつゝあるものと思はれ易ければ也。然れども若し一たび神之教會の性質を明かにし、宗派の何物たるかを辨知するに於ては、此の如き謬想は自ら消滅するに至るべし。是より以下の所論の主意は、即ち其の謬想を除却せんとするにあり。

説明の便宜上、先づ一の比喩を設けて述ぶることとせん。

爰に或る賢明の君主あり、合計百ヶ條より成る家憲を作り、其の一族をして之を守らしむ。且つ一國の民衆に令して曰く、凡そ此の百ヶ條を守る者は、之に王家の一人たる特權を與へ、其の産業の分配にあづからしむ可し。然れども此の百ヶ條に或る他の規則や條例を加ふる者、又たは之を削る者には、何等の特權をも與へざるのみならず、我が意に背く者として酬ゆるに責罰を以てす可しと。此の勅令に接したる國民は、皆な喜んで君主の意に従ふ事と思ひの外、或者は該百ヶ條中の四十ヶ條を採り、自家製造の九十ヶ條を之に加へて百三十ヶ條となし、別に天主家なるものを起すもあれば、或者は其の五十ヶ條を採り、自家製造の七十ヶ條を之に加へて百二十ヶ條となし、別に聖公家なるものを起すもありと云ふ次第にて、遂に美以家、組合家、日本基督教家、浸禮家、クリスチャン家、フレンド

家、福音家、救世家、聖潔家等夥しき新家の勃興を見るに至れり。而して其の甚だ狡猾なるものは、君主の制定せる百ヶ條を遵奉せざるにも拘はらず、敢て王家の稱を冒せり。情勢此の如くなる際に當つて、眞に君意を奉體する一團の徒起り、王家の一族と共に謹んで該百ヶ條を守り、眞に王家に屬する者とせられたり。然るに従來諸新家の勃興を見るに慣れたる世人は、直に之をも同種類のものと思惟し。彼と此との間に存する差異を發見すること能はざりき。但し其の心誠實にして君意を解せんことを切に望み、熱心に該家憲を研究せし人々は、遂に之を發見し、彼を棄て、此を奉ずる者となりたり。

此の比喻の寓意は甚だ明かなり。即ち君主は神にして、王家は神之教會、家憲は聖書、一族は使徒時代の聖徒の群、國民は全世界の

人類、諸新家は諸宗派なり。其の他は多く言ふの要なかる可し。唯だ誠實にして熱心なる聖書の研究者のみ能く眞偽を發見し得るとの一事は、最も注意す可き點たらざる可からず。

聖書の最終の卷たる黙示録の末部に曰く「若し此の書の預言の言に加ふる者あれば、神この書に記す所の災を以て之に加へん、若し此の書の預言を削る者あれば、神之をして此の書に記す所の生命の樹の果と聖城とにあづかること莫からしむ」と。蓋し「聖書は皆な神の黙示にして、教誨と督責また人をして道に歸せしめ、又た義を學ばしむるに益あり、是れ神の人の完全を得て諸の善事を行ふに缺けなからん爲めなり」。然らば則ち、人の考へに任せて之を取捨添削すべきものに非ず、「人をして道に歸せしめ又た義を學ばしむる爲め」あるひは「神の人の完全を得て諸の善事を行ふに缺けなからん

爲め」に條例や規則や信仰個條などを設くべきものに非ざる也。現在幾百の宗派團體が、各々、聖書の教義と人間の思想とを打ち混ぜて一種のものを作り、之を基礎として其の上に立つが如きは大なる曲事也、又た近來狡猾なる輩ありて、事實上聖書の教訓に従はず、ヤハリ自家製造の信仰個條を有しながら、表面は無宗派の如く襲ひ敢て神之教會の名を冒せり。憎むべき也。

神之教會は、救はれて此の世に在り、或は既に此の世を去りて天に在る凡ての人の總合也。基督を首として形成せる聖徒の一大家族也。

神之教會は、實に基督御自身に建設し給ひし所のもの也。即ち曰く「我が教會を此の磐の上に建つべし」と。斯くて一たび建設せられし以來、今日に至るまで連綿として繼續し、又た今後も永遠に繼

續する也。故に或る人々の思ふが如く、神之教會は近頃新に出來たるには非ざる也。唯だ其が永年間舊教の雲、新教の霧に蔽はれ、殆んど世人の眼に觸れざりしのみ。然るに今や神の深き攝理の下に、再び昔日の光明を發揮し來れるこそ芽出たけれ。凡そ眞の基督信徒にして、神之教會に屬せざる者あらず、隨て神之教會に屬せざる者は、眞の基督信徒に非ざる也。

神之教會の一員となる爲めには、之に就て何人の承認をも受くるを要せず、又た所謂會員名簿に其の名を記入せらるゝを要せず、唯だ眞に悔改めて福音を信じ、基督の救ひを得る其の瞬間に於て、即ち神之教會の一員となり、其の名は天に記さるゝ也。而して之が爲めに人爲の信仰個條や條例などを守る約束を爲すを要せず、又た月牧師の給料や會堂の維持費などを負擔するの約束を爲すを要せざ

る也。隨て如何なる場合にも他より出金を促さるゝが如きこと莫し唯だ自から聖靈の嚮導と信じ、神の榮の爲めに必要と認むる場合に於て、隨意に獻金するに過ぎざるのみ。

其の心誠實にして、眞に基督の聖旨を奉體するも、神之教會の性質を辨へず、宗派の非を悟らざるが爲めに、依然宗派の中に居る者少からず。此の如き人は事實に於て神之教會の一員たるも、其の知識不十分にして暗黒の中に在るが爲めに、宗派を棄つることをせざるなり。神は此の如き者を許し給ふべし。然れども其の人にして、一旦神之教會に關する知識を得、光明に照らされたる後、或は傲慢心の爲め、或は嫉妬心の爲め、或は一身上の都合の爲め、或は其の他何等かの善からぬ動機の爲めに、敢て宗派を棄つることをせず、依然其の中に止まるに於ては、其の事の爲めに罪人の列に加はり、

神之御手にある「生命の書」より其の名を除かるべし。故に此の如き場合に在る人々は、須らく左の御聲に耳を傾け、斷然之に従はざる可からず、曰く「我が民よ、爾曹かれの罪に共にあづかり、又た彼れの災に共に遇ふことを免れんがため、其の中を出づべし」と。終りに臨み、簡單に宗派なる語の意義を尋ねべし。予は拉典語を解せざれども或る人の説く所に據れば、宗派すなはち英語の sect なる文字は section (部分) なる文字と共に拉典語の secrete (切放つ、分離する) より來りしものにて、全體の中より切放ちたる、或は分離したる一部分との意義なりと。果たして然らば此は甚だ好く事實を顯はす所の語と云ふべし。何となれば現今の諸宗派は、各々全體たる神之教會より分離して、別一派を成せる小團體なればなり。又た新約書中に於ては sect (宗派) と heresy (異端) とは全く同一のも

のとして記されたり (使五〇十七同十五〇五、同二十四〇五、同二十四〇十四、同二十八〇二十二、哥前十一〇十九、加五〇二十、彼後二〇一を参考すべし)。即ち宗派は異端たる也。

# 聖なる教會

世には往々いふ者あり、此の地上に於ては到底聖なる教會を見ること能はず、假令一時は能く其の純潔を保ち得べしとするも、漸く發展増大するに従ひ、自ら其の中に不潔分子を混ざるを免れずと。是れ畢竟今日の所謂教會の歴史に鑑みて發したる所の、絶望的嘆聲なりとす。

今日の所謂教會の聖ならざることは何人も認むる所なり。其の中牧師たり傳道師たる者と雖も、此の事實を拒むこと能はず。是に於て乎彼等人に説て曰く、到底理想通りには行かぬものなれば、不満足ながら、止むを得ざることをして諦め、唯だ進歩改善を計るべきのみと。此は實に「聖書をも神の能力をも知らざるに由りて誤まれ

る」者の言なり。

見よ、主の使者はヨセフに告げて曰はずや、ダビデの裔ヨセフよなんぢ妻マリヤを娶ることを懼るゝ勿れ、その孕める所の者は聖靈に由るなり、かれ子を生まん、其の名をイエスと名く可し、そは其の民を罪より救はんとすれば也」と。イエスは實に人を罪より救ひ給ふなり。さればこそ天使は彼の牧羊者に告げて曰く「我れ萬民にかゝはりたる大なる喜びの音を爾曹に告ぐべし、それ今日ダビデの邑に於て爾曹の爲めに救主うまれ給へり是れ主なるキリストなり」と若しキリストにして人を罪より救ふこと能はずんば、彼は救主に非ず、隨て其の降誕は必ずしも喜の音に非ざる可し。然れどもキリストは實に救主なり。故に「天上ところには榮光神にあれ、地には平安人には恩澤あれ」との讚美も捧げらるべく、主なるイスラエ

ルの神は讃むべきかな、これ其の民を顧みて贖をなし、我儕の爲めに救の角を其の僕ダビデの家に立てたまへば也、古より聖なる豫言者の口を以て言ひたまひしが如し、即ち我儕を敵また凡て我儕を惡む者の手より脱す救なり、此は仁恵を我儕の先祖に施し、又た其の聖約を忘れじと也、是れ我儕の先祖アブラハムに立てし所の誓にして、我儕を敵(惡魔)の手より救ひ、我儕の生涯を聖と義に於て懼れなく主に事へしめんと也」とのザカリヤの豫言も空しからざることを知る也。

夫れキリストは既に人を罪より救ひ給ふ。即ち人をして「潔められ召されて聖徒」となることを得しめ給ふ。其の聖徒の集合體たる教會が聖なるべきことは敢て論を待たざるにあらずや。今日の所謂教會が聖なること能はざるは、畢竟、未だ罪より救はれざるもの、

集合體なるが故なり。嚴格なる意味に於ては決して教會と名くべきものに非ざるが故なり。

「かれ己れを捨てしは、水の洗を以て道に因りて教會を潔め、之を聖なるものとせんが爲めなり、また黠汚なく皴なく凡て此の如き類なく、聖にして瑕なき榮なる教會を自ら己の前に建てん爲め也」と。是れ明かにキリストの建て給ひし教會の聖なるべきを示し、隨て聖ならざるものはキリストの建て給ひし教會にあらざることを示すもの也。此の如き明白なる聖句あるにも拘はらず、仇恨あり、争闘あり、妬忌あり、忿怒あり、分争あり、結黨あり、異端ある所の今日の所謂教會を以て、キリストの建て給ひし教會なりと主張する者あるべきか、若しありとすれば、其は「此の世の神その心を盲ましたる不信者なり」。



キリストの建て給ひし聖なる教會が、動もすれば汚されんとすることあるは事實なり。さればこそキリスト曰く「もし兄弟なんぢに罪を犯さば、その獨りあるときに往きて諫めよ、もし爾の言を聽かば其の兄弟を獲べし、もし聽かずば兩三人の口に由りて證をなし、凡ての言を定めんが爲めに一人二人を伴ひ往きもし彼等にも聽かずば教會に告げよ若し教會に聽かずば之を異邦人かつ税吏の如き者とすべし、我まことに爾曹に告げん、凡そ爾曹が地に於て繋ぐことは天に於てもつなぎ、爾曹が地に於て釋くことは天に於ても釋くべし」とパウロは曰く「兄弟よ我れ爾曹に勸む、凡そ爾曹が學べる所の教に反きて争ひ分かつたせ、又た躓かする者を視とめて之を避けよ」と。又た曰く「我が爾曹に書き送りしは、兄弟と稱ふる者もし淫を行ひ、又たは貪ぼり、または偶像を拜み、または罵り、または酒に酔ひ、

または奪ふことをせば之と共に交ることなく、斯る者と食することだにも爲ざらしめんとして也、外にある者を勸くとは何ぞ我に與からん、爾曹が勸くところは内の者にあらずや、外にある者は神これを勸く、斯る悪人は之を爾曹の中より黜くべし」と。又た曰く「兄弟よ我儕主イエス、キリストの名によりて爾曹に命ず、我儕より受たる傳に循はずして妄りに行む諸の兄弟に遠ざかるべし」と。ヨハンは曰く「人もし此の教を有たずして爾曹に來らば、之を家に納るゝこと勿れ、彼に安かれと言ふ勿れ、彼に安かれと言ふ者は共に其の惡行に與みする也」と。使徒ユダは曰く「愛する者よ我が心を熱くして共に與る所の救の事を爾曹に書き送らんと思ひ居たりしが、今なんぢらに書を送りて、聖徒が一たび傳へられし信仰の道の爲めに力を盡して戦はん事を爾曹に勸めざるを得ず」と。此等の教訓を實行す

るとによりて、教會は汚さるゝことなく、何處までも其の純潔を保ち得る也。パウロの諸書翰中には教會の純潔を保つが爲めに記述せられたる所甚だ多し彼のコリント前書の如きは其の最たるもの也。

イ太廿二〇廿九。

ロ太一〇二十、二十一。

ハ路二〇十、十一。

ニ路二〇十四

ホ路一〇六十八—七十五。

ヘ哥前一〇二。

ト弗五〇二十六、二十七

チ哥後四〇四。

リ太十八〇十五—十八

×羅十六〇十七。

ル哥前五〇十一—十三

チ撒後三〇六。

リ約貳十、十一。

カ猶三。

### 新約の禮典

基督は舊約の儀式を廢して更に新約の禮典を設け給ひたり。バプテスマ、洗足禮、晚餐禮即ち是れ也。

#### △バプテスマ

基督將に天に擧られんとするに當り弟子等に告げて宣はく「爾曹ゆきて萬國の民にバプテスマを施し、之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とし、且つわが凡て爾曹に命ぜし言を守れと彼等に教へよ夫れ我は世の末まで常に爾曹と偕に在るなり」と。乃ち知る可し、バプテスマを施すことは主の儼たる命令にして、何人も之を廢するの權能なきことを。

此のバプテスマなる語の意味する所は必ず一ならざる可からず。故にパウロは曰く「主一、信仰一、バプテスマ一」と。然るに今日諸宗派の間に行はるゝ其の方式には種々あり。是を以て其の眞義を究め、我等の則るべき方式の果して如何なるものなる可きかを知るの必要ある也。

バプテスマの原語が沈めを意味することは語學者の確論なり。而してパウロが「イエス、キリストに合はんとてバプテスマを受けし者は、即ち其の死に合はんとて之を受けしなるを爾曹知らざるか、故に我儕その死に合ふバプテスマに由りて彼と共に葬らるゝは、キリスト父の榮に由りて死より甦されし如く、我儕も新しき生命に行ひべき爲めなり」と言ひ、又た「爾曹バプテスマを受けて彼と偕に葬られ、亦た死より彼を甦らし、神の大能を信ずるに因りて彼と偕

に甦らされたり」と言ひし所のものに徴すれば、其が單に頭上に水澱ぐが如きことに非ざるは明白なりとす。

今聖書中の實例に就て之を見んに、彼のペンテコステの時の記事に曰く「ペテロ彼等に曰ひけるは爾曹の悔改めて罪の赦を得んが爲めにイエス、キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば爾曹も聖靈の賜を受くべし……其の時この言を聞き納れし者はバプテスマを受けたり、此の日弟子に加はれる者およそ三千人」と此處には別に沈めたることを證す可き言辭なしと雖も、亦た之を否定すべき言辭も無し。或人は一日の中に三千人と云ふ多數の者に沈めの意味に於けるバプテスマを施すことは不可能の如く論ずれども此の時其の場に在りし弟子等は百人以上徒一〇十五なりし事實に想到せば、此の如き議論の根據の甚だ薄弱なるを知る可し。

次に彼のエテオピア人の女王カンダケの大臣なる寺人に關する記事の中に曰く、「ピリポをひらき此の録されたる所に基きてイエスの福音を彼に宣べ傳ふ、斯くて二人の者路をゆき水ある所に至りければ、寺人いひけるは水を見よ、我れバプテスマを受けんとす、何の障りか有るや、ピリポ曰ひけるは爾もし全き心をもて信せば可らん彼れ答へて曰ひけるは我れイエス、キリストは神の子なりと信ず、遂に命じて車を止めしめ、ピリポと寺人の二人水に下り、ピリポバプテスマを彼れに施せり、かれら水より上れるとき主の靈ピリポを引き去る」と。此に「水に下り」および「かれら水より上れるとき」とあるは、其のバプテスマの沈めの意味に於けるものなりし事を證す可し。

次にピリポの獄中に投ぜられたるパウロとシラスを看守せし獄吏

が、其の家族と共にキリストの福音を聽きて信するや、この夜の即時かれ二人を誘ひ、其の杖傷を洗ひて直に其の家族と偕に皆なバプテスマを受け、且つ彼等を己が家に引來り、食物を其の前に備へ、すべての家族と偕に神を信じて喜べり」と。此に「二人を誘ひ」とあるは即ち屋外の水ある處に誘ひ出せし也。而して其處に於てバプテスマを受けたる後再び「彼等を己が家に引來り」し也。若し此の時單に頭上に水漲ぐのみならずならんには、敢て屋外に出るの必要なく直に其の場に於て之を施し得しなる可し。

之を要するに、基督の定め給ひしバプテスマは、全身を水に沈むることたるや疑ひを容れず。序でに小兒の洗禮に就て一言すべし。元來小兒の洗禮に關してはキリストも其の弟子等も曾て教へざる所とす。然るに其今日行はる

は、他の多くの信條や規則と共に、全く人爲に係るものなり。キリストは宣はく、「信じてバプテスマを受くる者は救はれ、信ぜざる者は罪に定めらるゝ也」と。ペテロは曰く、「爾曹の〳〵悔改めて罪の赦を得んが爲めに、イエス、キリストの名によりてバプテスマを受けよ」と。又た「寺人いひけるは水を見よ、我れバプテスマを受けんとす、何の障りか有るや、ピリポ曰ひけるは爾もし全き心をもて信ぜば可らん、彼れ答へて曰ひけるは我れイエス、キリストは神の子なりと信ず、遂に命じて車を止めしめ、ピリポと寺人の二人水に下りピリポバプテスマを彼に施せり」と。以て知るべし、バプテスマを受くるは悔改めて信ずる者に限ることを。小兒は素より悔改むること無く又た信ずることも無し。而して彼等はキリストの贖によりて神の國に屬する者なり。故に「イエス嬰兒を呼び彼等の中

に立て、曰ひけるは、我れ誠に爾曹に告げん、若し改まりて嬰兒の如くならずば天國に入ることを得じ」と。

イ太廿八〇十九、廿。

ロ弗四〇五。

ハ羅六〇三、四。

ニ四二〇十二。

ホ徒二〇卅八、四十一。

ヘ徒八〇卅五—卅九。

ト徒十六〇卅三、卅四。

チ可十六〇十六。

リ徒二〇卅八。

ヌ太十八〇三。

### △洗足禮

バプテスマと晚餐の二禮典は、少數の教派を除くの外、大抵之を守ると雖も、信徒互に足を洗ふことも亦た一の禮典にして、他の二者と同じく、基督の設け賜ひしものなることを知るは稀なり。是を

以て洗足禮なる語すらも、多くは奇異の感を以て迎へられ、或は直に嘲笑の標的たらんとす。遮莫れ、今茲に聖書に基きて少しく考究する所ある可し。約十三〇二―十七に曰く、時に彼等晩飯の席につく、惡魔はかねてイエスを賣さんとする事をシモンの子イスカリオテのユダといふ者の心に發さしめたり、イエス己れの手にて父の萬物を賜ひしこと、神より來り神に歸ることゝを知り、晩飯の席を起ちて上衣をぬぎ、手巾を取りて腰に束ひ、而して盤に水をいれ、弟子の足を洗ひ其の束ひたる手巾にて拭きはじめ、遂にシモン、ペテロに及ぶ、ペテロ彼に曰ひけるは、主よ爾わが足を洗ふか、イエス答へて曰ひけるは、我が爲す所を爾今知らず後之を知るべし、ペテロ彼に曰ひけるは、爾斷へて我足を洗ふべからず、イエス答へけるは、若し我れ爾を洗はず

ば爾は我と干涉なし、シモン、ペテロ彼に曰ひけるは、主よ止に我が足のみならず手と首をも洗ひたまへ、イエス曰ひけるは、洗ひたる者は足のほか洗ふに及ばず而して全く潔し、爾曹は潔し、然れども盡くは潔き者に非ず、此はイエス己れを賣さんとする者の誰なるかを知るゆえに盡くは潔き者に非ずと曰へるなり、彼等の足を洗ひし後その上衣を取り、また坐りて彼等に曰ひけるは、我れ爾曹に行し事を知るか、爾曹われを師と呼びまた主と呼ぶ、爾曹の言ふ所は宜し、我は誠に是なり、我は爾曹の師また主なるに尙ほ爾曹の足を洗ふ、爾曹も亦た互に足を洗ふべし、我れ爾曹に例を示せり、此は我が爾曹に行し如く爾曹にも行さしめんが爲めなり、我れ誠に爾曹に告げん、僕は其主より大ならず又た使者は之を遣はす者より大ならず、爾曹もし之を知りて此の如く行さ

ば福なり。

と。此の中に於て最も注意すべきは「我は爾曹の師また主なるに尙ほ爾曹の足を洗ふ、爾曹も亦た互に足を洗ふべし、我れ爾曹に例を示せり、此は我が爾曹に行し如く爾曹にも行さしめんが爲なり」との是れなり。キリストは明白に「爾曹も亦互に足を洗ふべし」と命じ給ひたり、是れ晚餐禮設立の場合に於て「我を記へん爲めに此を爲せ」と命じ給ひし所と全く同一の權威を有し同一の服従を要求するもの也。後者の靈的に解すべからざるが如く前者も亦た靈的に解すべからず。共に文字通りに實行す可きもの也。況んや前者には特に「例を示せり」との一語あるに於てをや。

或人は此の事をば他の三福音書に記さずして、單に約翰傳のみに記するの故を以て、晚餐禮ほどに重要ならざるが如く思惟すと雖も

假令其の記事は唯だ一箇所なるにもせよ、其が基督の誠の一たる以上は、之を輕んじ之を棄つべき理由なし。基督は宣はずや「我がすべて爾曹に命ぜし言を守れと彼等に教へよ、夫れ我は世の末まで常に爾曹と偕に在る也」と。而して使徒時代に於て彼の禮典の守られたることは、パウロがテモテに送りし書中に「寡婦を其の籍に録すことは六十歳より若かゝる可からず、素より一個の夫の妻なりし者にて、善行の稱ある者若しくは子女を育てし者、若しくは旅客を館したる者、若しくは聖徒の足を洗ひたる者、若しくは惱める人を助けし者、若しくは務めて諸の善事に従ひし者なるべし」とあるに由りて明かなり。

又た或人は、アブラハムがマムレの檉林に於て三人の天使を迎へし際に「請ふ少許の水を取り來らしめ汝等の足を洗ひて樹の下に休

みたまへ」と言ひ、ロトが二人の天使をソドムの門に迎へしとき、「我が主よ請ふ僕の家に臨み、足を洗ひて宿り、つとに起きて途にすゝみ給へ」と言ひしこと等を引きて、賓客の足を洗はんが爲めに水を進むるはユダヤ人の習慣たりしとを證し、以て此の時基督は唯だ其の習慣を實行せしに過ぎざるかの如く説き去らんとす。然れども基督の命じ給ひしは、兄弟の愛と謙遜の念を以て「互に足を洗ふ」ことにして、全く新に設けられたる所の禮典也。

又た或人は以爲へらく、當時弟子等は草履を用ゐ、其の足は塵を以て汚れしが故に、通常ユダヤ人の爲すが如く基督は之を洗ひ給ひたるものに過ぎずと。ユダヤ人の草履を用ゐしは事實なるべし。然れども此の時彼等は素足にて草履を穿ちしや否や疑はし。何となれば「僕等と下吏たち寒に因りて炭を焼き、その處に立ちて暖まる、

ペテロも彼等と偕に立ちて暖まれり」との記事によりて知る如く、基督の弟子の足を洗ひ給ひし時は即ち四月初旬にして、未だ全く寒を脱せざりしが故なり。假りに素足にして塵に汚れたりとするも、其を洗ふは必ず家に入る前の事なり。然るに基督の弟子の足を洗ひ給ひし場所は大なる「二階坐敷」にして、而かも其の時は既に晩餐の席に就きたる後なり。誰れか彼等は汚れたる足のまゝにて二階に昇り嚴肅なる逾越の晩餐の席に就きしものなることを想像し得んや。之を要するに、洗足禮も、他の禮典と同じく、信者の守るべきものにして、基督の設け給ひしものなることは、信實にして且つ注意深き聖書の研究者の明かに悟り得る所なり。説き去り説き來る間に先年著者在米の頃、之を實行したりし當時の感想、油然として再び湧き來るを覺ゆ。一日、洗足禮に關する説



教の終りし後、例の如く、數尺の間を隔て、向ひ合せに椅子を併列せしめ（此の際男女場所を異にす）一同先づ靴および靴下を脱して之に着席したる時、有名なる説教者にして又た著述家たる某兄、上衣をぬぎ、五尺余の白布の一端を腰にまとい、他の一端を肩に打ち掛け側に備へられたる水を入れし中形の金皿を持ち來り、予の脚下に跪きて予の兩足を洗はれたり。嗚呼此の際に於ける予が胸底の感動は如何に強かりしぞ。洗ひ終りて彼の立ち上るや、予は涙を振ひつゝ伸び上りて彼の頸を抱きたり。彼も亦た其の兩の腕にて予を抱き感慨深き調子を以て唯だ「兄弟よ！」との一語を發し、共に接吻したり。程なく予も亦た彼か予に爲したりし如く、他の某兄の脚下に跪きて其の足を洗ひたり。洗ひ居るとき予はしみくと「爾曹もし之を知りて此の如く爲さば福なり」との聖語の意義を感得することを得たり。

得たり。

×路二十二〇十九。

イ太廿八〇二十。

□提前五〇九、十。

ハ創十八〇四。

ニ創十九〇二。

ホ約十八〇十八。

### △晚餐禮

晚餐禮の事は約翰傳に記されども、其の設立は洗足禮の直に後なりしことは、四福音書を對觀する者の容易に知る所なり。此の禮典に關してパウロは曰く、

我が爾曹に傳へし事は主より授けられたるなり、即ち主イエス賣さるゝ夜、パンを取り祝して之を擘さいひけるは取りて食せよ、此は爾曹の爲めに擘かるゝ我が體なり、爾曹も如此おこなひて我

を憶へよ、食して後また杯をとり前の如くして曰ひけるは、此の杯は我が血にして立つる所の新約なり、爾曹も如此ちこなひて飲むごとに我を憶へよ、爾曹このパンを食し此の杯を飲むごとに主の死を示して其の來るときまでに及ぶなり、然れば宜しきに合はずして此のパンを食し、主の杯を飲むものは主の體と血を干すなり、人みづから省みて後そのパンを食し其の杯を飲むべし、宜しきに合はずして食飲する者は、其の食飲に由りて自ら審判を招くなり、そは主の體を辨へざるに由る（哥前十一〇廿三—廿九）

晚餐に就ては多く言ふの必要なるべし。唯だ之を行ふ度数に關して一言を費して止まん。或人は徒廿〇七に「一週の首の日われらパンを擘く爲めに集りしが」とあるの故を以て、此は毎日曜日に行ふべきものゝ如く考ふれども、必ずしも然らず。此の一節を以て使

徒たちは毎週の首の日にパンを擘きたりとの證とは爲す可からざる也。假令ば新聞に「四月十五日某校の學生等向島に花を觀る」との記事ありたればとて、其の學校の學生等は毎年同月同日向島に赴くものとは爲すべからざるが如し。基督は之を行ふ度数に關しては何とも仰せ給はざりき。而してパウロも亦た「爾曹このパンを食し此の杯を飲むごとに主の死を表して其の來る時まで及ぶなり」と教へしのみ。故に之を何時守るかは人々隨意に定む可き也。



す、曰く「賜は殊なれども靈は同じ、職は殊なれども主は同じ、又た行爲は殊なれども一切の事を凡ての人の中に行ふ神は同じ、靈の顯を各人に賜ひしは益を得しめん爲めなり、或は靈によりて智慧の言を賜はり、或は同じ靈によりて知識の言を賜はり、或は同じ靈によりて信仰を賜はり、或は同じ靈によりて病を醫す能を賜はり、或は異能を行ひ、或は豫言し、或は靈を辨へ、或は方言をいひ、或は方言を譯するの能を賜はれり、然れど凡て此等の事を行ふ者は同じく一靈なり、彼れその心のまゝに各々に願け與ふるなり、體は一にして多くの肢あり、一體の凡ての肢は多けれども一の體なり、キリストも亦た此の如し、或はユダヤ人、或はギリシヤ人、或は奴隸、或は自主に拘はらず、我儕みな一靈に在りてバプテスマをうけ一の體となり、又た皆な一の靈を飲めり、そは體は一肢のみに非ず多く

あれば也……これ體のうち分るゝ事なく諸の肢たがひに相顧み扶けん爲めなり、若し一の肢くるしまば諸の肢ともに苦しみ、一の肢尊とばれなば諸の肢ともに喜ぶなり、爾曹はキリストの體にして亦た各々その肢なり」と。

此の本文中の「肢」は宗派の各團體を指し、其等が相結合して所謂「一の體となる」もの如く思惟する人あり。然れども其の「肢」は即ち救はれたる「各人」なり。今假りに「これ體のうち分るゝ事なく諸の肢たがひに相顧み扶けん爲めなり、若し一の肢くるしまば諸の肢ともに苦しみ、一の肢尊ばれなば諸の肢ともに喜ぶ也」との句中の「肢」を以て一個の宗派團體となさんか、實に下の如き奇々怪々な意味となるべし、曰く「これ體のうち分るゝ事なく諸の宗派團體たがひに相顧み扶けん爲めなり、若し一の宗派團體くるしまば諸の

宗派團體ともに苦み、一の宗派團體尊ばれなば諸の宗派團體ともに喜ぶ也」と。誰か之を首肯せんや。況んや其の末部に「なんぢらは基督の體にして亦たおのく（各個人）其の肢なり」とあるに於てをや。

神の子供等の一致は、之に由て世に神を示すに足るべし。故にキリストは宣はく「父よ爾われに居り、我れ亦た爾に居る、かくの如く彼等も我儕に居りて一にならん爲め、且つ世をして爾の我を遣はし、事を信ぜしめん爲めなり……われ彼等に居り爾われに居る、そは彼等をして一に全くならしめ、且つ世をして爾の我を遣はし、こと、又た爾われを愛する如く彼等をも愛することを知らしめんと也」と。然るに若し神の子供等の間に一致なからんか、之れに由つて世に神を隠し、救はるべき者も終に救はれずして止むに至るべし。事

實上、今日の宗派分裂の醜態を見聞するが爲めに、基督に來らんとせしも終に來らずして止む者多し。聖書中分裂を戒むる所多きも亦た故ある也。パウロ曰く「忍耐と慰安を與ふる神の爾曹にイエス、キリストを習ひ、互に心を同うすることを與へて、爾曹をして心にし、口を一にし、神すなはち我儕の主イエス、キリストの父を讚美し崇めしめ給はんことを願へり」と。又た曰く「兄弟よ我儕の主イエス、キリストの名によりて我れ爾曹に勸む、爾曹みな言ふことを同うし、且つ分争なく、心を同うし意を同うして一つに合ふべし」と。又た曰く「兄弟よ爾曹喜び、且つ全くなり、且つ慰め、且つ心を同うし、且つ和ぐことをせよ、然らば愛と平安の神なんぢらと偕に在らん」と。又た曰く「なんぢら念を同うし愛心を同うし、意を合せて念ふことを一にし、我が喜びを満たしめよ」と。ペテロ

も曰へり「終りに我これを言はん爾曹みな心を同らし云々」と。  
 然らば如何にして神の子供等は悉く一致することを得べきか、曰く、誰も皆な聖書を唯一の典據となし、之を削らず之に添へず、其の教ふるまゝを守るにあり。パウロはテモテに與へし書中に於て曰はずや「聖書は爾をしてキリスト、イエスを信するに依りて救を得しめん爲めに智慧を與ふるもの也、聖書はみな神の默示にして教誨と督責また人をして道に歸せしめ、又た義を學ばしむるに益あり、これ神の人の完全を得て諸の善事を行ふに缺なからん爲めなり」と勿論此に謂ふ所の聖書は即ち舊約書なるが、パウロは其の舊約書のみを以て十分なりとは曰はず「キリスト、イエスを信するに因りて救を得しめん爲めに智慧を予ふるもの也」と曰へり。當時新約書は未だ今日のものゝ如き形を以て存せざりしと雖も、其の教訓は素よ

り既に使徒等によりて傳へられし也。故に其の教訓と舊約書の教訓と相待つて始めて「神の人の完全を得て諸の善事を行ふに缺なからしむる也」。

或は曰はん、聖書を唯一の典據として其の教ふるまゝを守ることは、敢て異論なしと雖も、之を解釋するに當つて異同あるを如何せんと。之に對して茲に一言を試みんか、

凡そ一國に於て憲法の發布せらるゝや、全國民は其の文字の末に拘泥せず、又た之を曲解せず、只管發布者の眞意如何を尋ね、之を悟り之を遵奉せざる可からず。而して發布者の眞意は常に必ず一なり。同一の明文中に二様三様の意義を含ませ、其の孰れを取るも勝手たる可しと云ふが如きこと決して無し。若し然らずんば争で國政を統一し得んや。夫れ聖書は神が全世界の人類に與へ給ひし憲法な

り。たとへ其の記述の國語は現今四百種以上ありと云ふにもせよ、各章各節に含まる、神の聖意は必ず一ならざる可からず。故に亞細亞人にもせよ、亞米利加人にもせよ、歐羅巴人にもせよ、亞弗利加人にもせよ、各々其の讀み得る所の國語に由つて只管神の聖意を尋ね、之を悟り之を遵奉せざる可からず。

何れの書物を讀むにもせよ之を曲解するの危険を免れんが爲めに取るべき方法の一は、徒らに一局部の文字に拘泥せず、其の前後の關係を明かにするは勿論、須らく大體の精神を看取し、其の中に矛盾や衝突なからしめざる可からず。蓋し同一の著者にして、一方には之を肯定し、他方には之を否定するが如きことなければ也。聖書の解釋を試むるに當つても、必ず常に此の一事を記憶せざる可からず。

既に聖書の本文の意義は一にして、各人其の意義を了解し、謹んで之を遵奉するに於ては、其の人々の間に一致の存す可きは素より當然の事なりとす。

- イ 約十七〇廿一廿三
- ロ 約十〇十六
- ハ 約十一〇五十二
- ニ 加三〇廿七、廿八
- ホ 哥前十二〇四一廿七
- ヘ 羅十五〇五、六
- ト 哥前一〇十
- チ 哥後十三〇十一
- リ 腓二〇二
- ヌ 彼前三〇八
- ル 提後三〇十五一十七





はし、ことを信ぜしめん爲めなり（信徒等の中に分裂あらば、其れが爲めに人をして躓かしむべし、然れども其の一致は人をしてキリストを信ぜしむべし）、爾の我に賜ひし榮を我れ彼等に授けたり、此は我儕の一なるが如く、彼等も互に一にならん爲めなり、我れ彼等に居り、なんぢ我に居る、そは彼等をして一に全くならしめ（不完全なる一致に非ず）、且つ世をして爾の我を遣はし、こと、又た爾われを愛する如く彼等をも愛することを知らしめんと也」（約十七〇九—廿三）と。キリストの此の祈禱は決して一個の空想に非ず、必ず實現せらるべきもの也。而して事實上、眞に聖められたる信徒等の間には、常に實現せらるゝ也。

猶ほ信徒の一致に就ては、約十〇十六同十一〇五十二。徒四〇卅一—卅三。羅十二〇四、五。同十五〇五、六。哥前一〇十。同二〇十六。

同三〇七、八。同六〇十七。同十二〇四—廿七。哥後十三〇十一。加三〇廿七、廿八。弗二〇二。同四〇四—六。腓一〇廿七。西二〇二。彼前三〇八等の諸聖句の意義を深く研究することに由りて大に學び得らるべし。

### 教役者の生計

基督その十二弟子を遣さんとして命じ給はく、「爾曹金または銀または錢を貯へ帶ぶる勿れ、行囊、二つの裏衣、屐、杖も亦た然り、そは工人の其の食物を得るは宜なり」と。パウロも曰く、「誰か軍に出で、己の財を費す者あらんや、誰か葡萄園をつくりて其の果を食はざる者あらんや、誰か羊を牧ひて其の乳を飲まざる者あらんや、我れ人の事にのみよりて之を言はんや、律法も亦たかく言ふに非ずや、モーセの律法に穀物を碾す牛に口籠を繫くべからずと録されたり、神牛の爲めに慮り給へる乎、又たは我等の爲めにのみ之を言ひたまひし乎、こは我等の爲めに録し給へる也、そは耕す者は望ありて耕し、穀物を碾す者は其の穀物を得るの望ありて碾すは宜なれば

也、我等もし爾曹の爲めに靈の物を播きたらば、爾爾の肉の物を獲り取るは大事ならんや、他の人もし此の權威を爾曹の上に有たば、況て我等をや、然れど我等此の權威を用ひず、キリストの福音に阻隔なきやうに我等すべての事を忍ぶ、爾曹知らざるか、聖き事を務むる者は殿の物を食し、登壇に事ふる者は祭壇と共に其の頌ちを取ること、此の如く主福音を宣傳ふる者は、福音によりて生活すること、これを定め給へり」と。又た曰く、「道を教へらるる者は道を教ゆる者に凡て有益なる物を分け與ふべし」と。

此等の本文に由りて、教役者たるもの、一身一家は、之を支ふるに必要なる物をば、其の教導を受くる人々より供給せらる可きものたるを知るべし。

然れども此は決して今日の諸宗派間に行はるる俸給制度を是認す

るものに非ず。先頃某派に於ては、教職俸給標準規定なるものを設け、各教會は此の標準に基づきて、牧師傳道師を待遇すべき旨を公示したり。思ふに此の派のみならず他の諸派の中にも、殆んど同様の規定あるもの少からざるべく、假令之なしとするも、其の牧師傳道師を招くに當り、豫め月俸又は謝金何程と約束するは通例なるが如し。此の如きは素より聖書の教へざる所にして、神之教會内には曾て見ざる習慣なりとす。

基督宣はく「爾曹價なしに受けられたれば亦た價なしに施すべし」と前に言へるが如く「主福音を宣傳ふる者は、福音によりて生活することと定め給へり」と雖も、價を定めて福音を宣傳ふべきものにあらず。聖書は道を教へらるる者に對しては「道を教ゆる者に凡て有益なる物を分け與ふべし」と告ぐると同時に、教役者に對しては「

爾曹の中にある神の羊の群を牧へ、之を牧ひ司るに止むを得ずして爲さず、好みて爲し、利を貪るために爲さず、樂みて爲すべし」と勸む。又た言へることあり「夫れ我が神は己の富に従ひて、キリスト、イエスにより、榮光を以て爾曹の乏しき所を補ひ給はん」と。教役者たるものは神の此の約束に信頼し「生命の爲めに何を食ひ、何を飲み、また身體の爲めに何を衣んと思ひ煩ふ事なく」專念一意己の本務に盡瘁す可き也。然らば「此等のものは皆な爾曹に加へらるべし」。

或は問はん、一地方に於ける聖徒の數少なく且つ微力にして、其所に働く所の教役者の生計の資を供給し得ざる場合には如何と。答へて曰く、神之教會は全世界の至聖徒の一大家族なり。遠近の差、國土の異、人種の別等によりて、相顧み相助くるの情に厚薄あるこ

となく「若し一の肢くるしまば諸の肢ともに苦しみ、一の肢尊ばれば諸の肢ともに喜ぶ也」更にパウロがコリント人に告げし所を聴く可し、曰く「若し人ねがふ志あらば其の無き所によらず、其の有る所によりて納給ふべし、我れ他の人を安逸して爾曹を困苦めんとするに非ず、平均せんことを欲ふ、爾曹の餘りあるを以て彼等の足らざるを補ひ、亦た彼等の餘りあるを以て爾曹の足らざるを補ひて平均せんが爲めなり」と。所謂教會獨立問題の如きは「分争」、**「結黨」**を事とする宗派間に於てのみ見るを得べく、神之教會に於ては決して見る可からざる所のものなり。

イ太十〇九、十

ハ加六〇六

ホ彼前五〇二

ト太六〇廿五

リ哥前十二〇廿六

ロ哥前九〇七一十四

ニ太十〇八

ヘ腓四〇十九

チ太六〇廿三

メ哥後八〇十二一十四

### 俸給制度の弊害

教役者が一定の俸給を受けつゝ、傳道に従事することは、全く人爲の制度に外ならざるが故に、之に伴ふ諸種の弊害あり。

先づ第一の弊害は、事實神の召しを蒙らざるにも拘はらず、俸給を目的として傳道の聖職を濫す者あること是れ也。彼等は即ち「牧者にあらず、己が羊を有たず、唯だ雇はれて羊を守る者」なるが故に、「狼（不遇、窮乏等）の來るを見れば羊を棄て、逃ぐ」。此の實例は既に多し。又た同一の轍を踏まんとする者も少なからざる可し然れども眞に召されたる者は、素より一定の俸給を受くることなく「我等をして己の跡に隨はしめんとて式を我等に遺し給へる」キリストに効ひ、たとへ「羊の爲めに命を捐つ」るも、決して逃ぐるこ

となかる可し。

教役者にして一定の俸給を受けんか、勢ひ會員たる者の負擔額を定めざる可からず。既に負擔額を定めんか、勢ひ各人その中に欲ふ所に隨ひて施すべし、憂へて爲すべからず、亦た強ひて爲すべからず、そは神は喜びて施しをする者を愛し給へばなり」との教訓を實行すること能はず、「憂へて」また「強ひて」支出することある可し。又た其の支出の動機が専ら神に事ふるの信仰に在らずして、人の迷惑や他の振合に左右せらるゝの恐れなしとせず。此に至つては一般世人が勸化帳に寄附金額を記入する場合と、其の心事に於て殆んど撰ぶ所なし。

俸給を目的とする教役者は、自然、富者を重んじ貧者を輕んず。而して若し人金の指輪をはめ、美はしき衣服を着て爾曹の會堂に

來り、又た貧しき人汚れたる衣服を着て來らんには、なんぢら美はしき衣服を着たる人を顧みて爾この榮位に坐れと曰ひ、又た貧しき者に爾彼處に立てと曰ひ、或は我が足下に坐れと曰ひ、「各人のうち區別を立て」「人を偏り視る」の傾きあるを免れず。且つ彼等は富者に對して寛容に過ぎ、其の罪惡を責めず、隨て其の靈魂を危ふするの恐れあり。蓋し彼等に、たとへ「其の首を盆にのせ」らるゝに至るも、儼として「爾兄弟の妻を納るゝは宜しからず」とヘロデ王を切諫せしヨハネの勇氣あり得るや否や疑はしければ也。

神之教會の教役者は、通常各個人が隨意に與ふる所の贈物を受く而して其の兩者の外には誰も之を知る者なし。與ふる者は神に事ふるの念を以て與へ、受くる者は與ふる人の厚意を通じて神より與へられたるものと信ず。又た或人は、便宜上、直接に教役者に贈らす

聖徒によつて組織せられたる會社か、又は個人に托して送ることあり。此の場合には其の會社または個人は、必ずしも其の寄贈者の姓名を明かにせずして之を教役者に贈る。此の如き次第なるが故に自己以外の何人が何程の献金を爲せしかは、殆んど知ることなく、又た自己の献金の額を人に知らしむることなし。故に人に見せん爲めに其の義を人の前に爲すことを「好むが如き人は、たとへ富むと雖も少なく與へ、右の手の爲すことを左の手に知らさじ」と心掛くるが如き人は、たとへ貧しと雖も多く與ふることある可し。要するに其の献金の動機は「人の榮を得ん爲め」に非ずして、全く神に事ふるにあり。而して「隠れたるに見給ふ天の父のみ」適當に彼等に報い給ふなり。

然らば勿論教役者の受くる所一定せざるを知る可し。時には少な

く時には多し。而して其の少なき時には會員に愁訴するか、曰く否唯だ忍び且つ祈りて其の補はれんことを待つのみ。パウロ曰く「我れ貧賤に居るの道を知り、また富厚に居るの道を知り、飽くことも飢ること、富むことも、乏しきことも、諸の事に於て我れ之を熟練せり」と。蓋し凡ての教役者は斯くある可き也。

次に其の多き時には贅澤に生活するか、曰く否、神の教會の教役者は、受くる事のみを知りて與ふる事を知らざるが如き貪慾なる者に非ず。パウロ曰はずや「我れ人の金銀衣服を貪りしことなし、我が此の手は我れ及び我れと偕に在りし者の需用に供へし事は爾曹の知るところ也、我れ爾曹もかく勸務て柔弱者を扶け、且つ主イエスの曰ひ給へる受くるよりも與ふるは福なりとの言を心に記むべきを凡ての事に於て示せる也」と。パウロは勿論人より金銀衣服を受け

たることあるに相違なし、彼れビリビ人に送りし書中に於て「爾曹は我れテサロニケに在りし時一度ならず二度までも人を遣はし我が乏しきを助けたり」と言へり。然れども彼れは決して「貪りしことなし」。又た「柔弱者を扶け、且つ主イエスの曰ひ給へる受くるよりも興ふるに福なりとの言を心に記むべきを凡ての事に於て示し」たり。故に教役者も亦た人に興ふることある可きなり。キリスト及び其の弟子等も同一の事情なりしことは、下の一節によりて之を知らん、曰く「或人ユダは金囊を預れる故イエス彼をして節筵について用ゐべき物を買はしむるならんか、亦たは貧者に施さしむるならんと意へり」と。

イ約十〇十二

ロ約十〇十一

ロ彼前二〇廿二

ニ哥後九〇七

ホ雅二〇二、三

ト太六〇一

リ太六〇二

ル徒廿〇卅三―卅五

ヲ約十三〇廿九

ヘ可六〇十八

チ太六〇三

ヌ腓四〇十二

ヲ腓四〇十六

穿き門

キリストは仰せたまはく「窄き門より入れよ、沈淪に至る路は濶く、その門は大なり、此より入る者多し、命に至る路は窄く、其の門は小さし、其の路を得る者まれなり」と。見よ、窄き門に入ると入らざるとは、實に我等の生くと滅ぶるとの差異を生ずるなり。我等にして一たび此の點に想ひ到らば、問題の甚だ輕からざるに心付き、所謂窄き門とは果して何を意味するものなるかを究めんとするの情自ら切ならざるを得ざる可し。

各宗派の教會に於ては、自然、自派の信仰個條、規則、條例等こそ所謂窄き門にして、之を信じ之を守る者は則ち生命に至るべきことを教ゆるならん。若し然らずんば、此等のもの、必要を認めらるべき理由なければ也。

べき理由なければ也。

然れどもキリストは宣はく「我は門なり若し人われより入らば救はれ、且つ出入をなして(Go in and out)牧場の門に入り其の中に出で草を得べし」と。又た宣はく「我は途なり、眞なり、生命なり」と。以て知る可し、キリストは即ち門にして、又た途なることを。故にキリストより入り、キリストの中に歩む者は即ち生命を得る也。而して此は決して一種の信仰個條、規則、條例等を信じ、之を守ることに非ざる也。

抑もキリストより入り、又たキリストの中に歩むとは何の意ぞや。曰く、是れ畢竟キリストを信じ、且つ其の教訓を信じて之を實行すること也。單に其の教訓の或る部分を實行するに止まらず、全部を實行することなり。何となれば彼は其の將に天に昇らんとするに當



つて、弟子等に告げて、「我がすべて爾曹に命ぜしことを守れと彼等に教へよ」と言ひ給ひたれば也。

茲に我等の記憶すべきは、十二弟子等の教訓、及びパウロの教訓も、畢竟キリストの教訓たる事之なり。何となれば彼は死より復活せし後十二弟子等に告げて、「父の我を遣はし、如く我も爾曹を遣はさん」と言ひ給ひたれば也。又パウロはガラテヤ書中に於て、「兄弟よ我れ爾曹に示す、我れ曾て爾曹に傳へし所の福音は人より出るに非ず、そは之を人より受けず、亦た教へられず、唯だイエス、キリストの默示に由りて受けられたれば也」と言ひたれば也。

キリストの教訓、十二弟子等の教訓、パウロの教訓は新約書中に満つ。素より今茲に枚擧するに堪へず。唯だ僅に其の二三を摘記せんか。

キリスト宣はく、「人もし新に生れずば神の國を見ること能はじ」と。又曰く、「凡そ我に來りて其の父母、妻子、兄弟、姉妹、また己の生命をも憎む者に非ざれば、我が弟子と爲ることを得ず、爾曹その所有を盡く捨てざる者は、我が弟子と爲ることを得ず」と。ヨハネ曰く、「此の世あるひは此の世に在るものを愛する勿れ人もし此の世を愛せば父を愛するの愛その裏に在るなし、凡そ世に在るもの即ち肉體の慾、眼目の慾また勢より起る驕傲これらは皆な父より出るに非ず、世より出るもの也、此の世と其の慾とは過ぐるものにて、神の旨を行ふ者は限りなくとまる也」と。ヤコブ曰く、「爾曹世を友とするは、神に敵するなるを知らざらんや、世の友とならんことを思ふものは神の敵なり」と。ペテロ曰く、「基督なんぢらの爲に苦しみを受け爾曹をして己の跡に隨はしめんとて、式を爾曹に遺した

まへる也、彼れ罪を犯さず、又た其の口にいつはり莫かりき、彼れのしられてのしらず、苦しめられて厲言を出さず、只だ義を以てさばく者に之をまかせたり」と。パウロ曰く「なんぢら不信者と耦ふなかれ、そは義と不義と何の侶なるとか有らん、光と暗と何の交はることか有らん、キリストとペリアルと何の合ふことか有らん信者と不信者と何の干ることか有らん、神の殿と偶像と何の同じきことか有らん、夫れ爾曹は活る神の殿なり、神嘗て我かれらの中に住り、またあゆまん、我かれらの神となり、彼等わが民とならんと曰ひ給ひしが如く、又た爾曹彼等の中より出て之を離れ、汚穢に捫ること勿れ、我なんぢらを納ん」と。又た曰く「なんぢら愛せらるゝ兒女の如く神に效ふべし、また愛を以て行ひキリストの我儕を愛し我儕に代りて己を禮物となし犠牲となして神の前に馨香あらしめん

とて獻給ひしが如すべし、聖徒たるに符ふごとく奸淫および凡の汚穢たる事また食欲ことを互に言ことだに爲勿れ、淫事と浮言と戯謔を言なかれ、是れ宜からざる事なり寧ろ謝することをすべし」と。又た曰く「婦女は耻を知り、よく慎みて宜しさに合ふ衣にて自ら飾り、髪を編こと、金と、眞珠と、價貴き衣を以て妝飾とせず、善行を以て妝飾とせんことを願ふ、神を敬ふ女は如此すべき事なり」と。又た曰く「夫れすべての人に救ひを賜ふ神の恵あらはれ我儕を誠め、我儕をして神を敬はざる事と世の中の慾を棄て、自ら制し、正しく且つ度みて今の世に存らへ、望所の福と大なる神すなはち我儕の救主イエスキリストの榮の顯れん事を望待しむ」と。凡そ此等の教訓をば、其の日常の生涯に於て實行せざる所の者は、未だ以て窄き門に入りたる人、生命に至る路を歩む所の人と云ふこ

とを得ざる也。

- イ 六七〇十三、十四
- ハ 約十四〇六
- ホ 廿〇廿一
- ト 約三〇三
- リ 約壹二〇十五—十七
- ル 彼前二〇廿一—廿三
- ヲ 弗五〇一—四
- ヨ 多二〇十一—十三

- ロ 約十〇九
- ニ 太廿八〇廿
- ヘ 加一〇十一、十二
- チ 路十四〇廿五—廿三
- ヌ 雅四〇四
- ナ 哥後六〇十四—十七
- カ 提前二〇九、十

### 宗派雜說

宗派分立の非を悟り、其間に行はるゝ弊害を認むるにも拘らず、尙之を棄てざる者あり。其人々の説に曰く、我等は敢て宗派を重視する者に非ず、否な寧ろ之を眼中に置かざる者なり。而かも現に某宗派に屬する所以のものは、斯くあればとて、真正のクリスチャンたるに妨げ無ければなり。蓋し真正のクリスチャンたらんが爲めに、聖書の教ゆる所を守らば足れり、何を區々たる宗派の事に拘泥すべけんやと。是れ一應甚た卓見の如く聞ゆれども、實は其の思想粗笨にして、自家撞着の點あるを免れざるなり。何となれば、聖書は、會て宗派の存立を認めざるのみならず、今日宗派の間に行はるゝが如き事は、絶對的に之を禁ずれば也（哥前一〇十、弗四〇四—

六雅三〇十四以下、約壹二〇十五—十七等參照)  
 又た他の一種の人々は曰く我等は別々の宗派に屬し、  
 特種の教義を信じ、特種の儀式を守り、特種の習慣を追ふと雖も、  
 其目指す所は一なり、即ち神に到るにあるのみ、  
 分け登る麓の道を異にするも、同じ高峯の月を觀んことを期する以上は、  
 敢て咎むるにも及ばざるに非ずやと。其の説く所甚だ巧妙なりと雖も、  
 聖書の教ゆる所と相合はざるを如何せん。キリスト宣はく「  
 我は途なり眞なり生命なり人若し我に由らざれば父の所に往くこと能はず」と。  
 彼の高峯に登るべき麓の道は數多あらん、然れども神に到るべき途は唯だ一、  
 即ちキリストの教訓あるのみ。凡そ此の途に由らざる者は決して神に到ること能はざるなり。  
 今彼の諸宗派の間に行はるゝ教義、習慣等を見るに、キリストの教訓に違ふもの多し。  
 然るに之を固守しつゝ、

天國に入らんことを期するも、到底其の空望たるを免れず。キリストは明かに告げ給はずや、  
 我を呼びて主よ主よと曰ふ者悉く天國に入るに非ず、  
 唯だこれに入る者は我が天に在す父の旨に遵ふ者のみなり」と。

又た他の一種の人々は曰く、たとへ所屬の宗派を異にするも、  
 靈に於ける一致を保ち得ば則ち足るに非ずやと。論より證據に訴へよ  
 現在諸宗派の間に靈に於ける一致なるものありや。又た將來之を實  
 現すべき期望ありや。キリストは祈り給はく「  
 我れ唯だ彼等の爲めにのみ祈らず、  
 彼等の教に由りて我を信する者の爲めにも祈るなり、  
 此は皆な一にならん爲なり、父よ爾われに居り我れ亦た汝に居る、  
 此の如く彼等も我儕に居りて一にならん爲め、  
 且つ世をして爾の我を遣はし、  
 事を信ぜしめん爲めなり、爾の我に賜ひし榮を我れ彼等

に授けたり、此れ我儕の一なるが如く彼等も互に一にならん爲めなり」と。パウロは曰く「兄弟よ我儕の主イエス、キリストの名によりて我れ爾曹に勸む、爾曹みな曰ふことを同うし、且つ分争なく、心を同うし、意を同ふして聯合すべし」と。又た曰く「なんぢら念を同うし、愛心を同うし、意を合せて念ふことを一にし、我が喜びを満たしめよ」と。蓋し此の種の一致結合は「主一、信仰一、バプテスマ一」なるに至て殆めて成就すべきもの也。換言すれば現在の宗派なるものは悉く消滅して、單に聖書の教訓のみ實行せらるる時に於て、始めて見ることを得べきもの也。

又た他の一種の人々は曰く、我等は宗派の中に積弊あるを知る、而かも敢て之を脱せざる所以のものは、之を善導して改革せんが爲めなり。キリストも罪人を救はんが爲めに罪人の中に來り給へり。

パウロも「ユダヤ人には我れユダヤ人の如くなれり、此れユダヤ人を得ん爲めなり」と言ひしに非ずや。宗派の弊を見て直に之を棄て去るは、其の中に在る者を救はんとするの愛心なきに坐すと。是れ甚しく引例を誤りしものなり。見よキリストは罪人の中に來り給ひしと雖も、曾て罪人の如く行ひ給はざりしに非ずや。パウロはユダヤ人の如くなりしと雖も、曾て彼等の不徳に與せざりしに非ずや。夫れ宗派は其れ自身罪なり。自ら其中に在りて同じ事情の下に在る者を救はんとするも豈に得べけんや。此の如きは猶ほ泥酔者の泥酔者を助けんとするに異ならず。眞に泥酔者を助け得る者は、自ら醒めて足許確かなる者ならざる可からざる也。

又た他の一種の人々は曰く、我等は何れかの宗派に屬せざること能はず、一を去りて他に就くも、其所には又た其所相應の弊習ある

可し。或は現在之なしとするも、後日之を生ぜざるを保すべからず  
 如かず寧ろ此の儘にあらんにはと。ア、我等は果して斯く不満足の中  
 中に満足せざる可からざるが。竟に全き満足を得るの境なきか。神  
 に感謝せよ。かれ己を捨しは水の洗を以て道に因りて教會を潔め之  
 を聖なるものとせんが爲めなり、また黥汚なく皺なく凡て此の如き  
 類なく、聖にして瑕なき榮なる教會を自ら己の前に建てん爲め也」  
 と。而して其の教會は今現に在り、人一人たび其の中に入らば「エホ  
 バは我が牧者なり、我れ乏しきことあらじ、エホバは我をみどりの  
 野にふさせ、いこひの水濱にとまひたもふ、エホバは我が靈魂を  
 いかし、名のゆゑをもて我を正しき路に導き給ふ、たとひ我れ死の  
 かげの谷をあゆむとも禍害をおそれじ、なんぢ我と共に在せばなり  
 なんぢは我が仇の前に、我が爲めに筵をまうけ、我が首にあぶらを

そしぎたまふ、我が酒杯はあふるゝなり、我が世にあらん限りはか  
 ならず恩恵と憐憫と我れにそひ來らん、我はとこしへにエホバの宮  
 にすまん」と歌ふことを得べき也。ハレルヤ。

或は問はん、宗派の中にありて救はれたる者なきかと。余輩は之  
 に答へて曰はん、多少これあるは事實なりと。然れども記憶せよ、  
 其の人々は決して宗派によりて救はれたるに非らず、唯た聖書を信  
 じて救はれしものなることを。

此に於てか更に問はん、たとひ宗派が其人々を救はざりしにもせ  
 よ、宗派は其人々を聖書に導き、以て救はるゝに至らしめたるもの  
 なり。然らば則ち宗派も亦人を救ふの機關ならずとせんやと。予輩  
 は今之に對するの答として一の譬喩を語る可し。爰に酒舗あり、壁  
 上掲ぐるに數多の繪畫を以てす。其の中にはキリストの聖像もあり

き、來客の多くは唯だ餘の書を眺めつゝ酒を汲むのみなりしが、他の或人々はキリストの聖像を仰ぎて深く感動し、己が徳性の涵養上少なからず益する所ありたり。但し飲酒の不徳なるを知らざりしが爲めに、同舖を訪ふことは曾て止めざりき。事情此の如くなりしを以て、酒舖をば徳性の涵養所となし、其の存在の必要を唱ふる者あるべきか。

夫れキリストの聖像は、其れ自身人に感化を與ふるもの也。酒舖は其効力を滅殺せしめこそすれ、之が爲めに何の資する所なし。若し前記の人々にして、キリストの聖像より、より多くの感化を受け随つてより多く徳性を涵養せんことを望まば、宜しく酒舖に到ることを止め、自ら同一の聖像を得て之を自家の壁間に掲げ、或は正當に之に就て説明を與ふる集會に出席すべきなり。嗚呼該酒舖にして

最初より酒舖ならず、又た雑多の繪畫を掲げず、單にキリストの聖像のみを掲げ、之に就て正當に説明し、且つ渴ける者に酒ならぬ生命の水を與へ來たりしならんには、如何に多くの人を眞の救に導き得たりしことぞ。思へば残念の至りにこそ。

又た一種の人々あり、宗派問題に關して、或は聴き或は讀む所あるも、之に對して深き注意を拂ふことなく、漫然として打ち過ぐ。此の如きは「餓え渴く如く義を慕ふ者に」非ざることを示し、且つ「凡てのこと考へて其の善きものを守れ」との訓誡を輕視するもの也。よろしく三省して彼のペリテ人に學ぶ所あるべし、曰く「此の處の人々はテサロニケの者よりは性情よきが故に、好みて道をさし此の如きこと果して有るか無きかを知らんとて、日々聖書をさぐれり」と。

之を要するに、何れの點より考ふるも、眞正のクリスチャンたる者は、斷然宗派を棄つ可き也。

イ約十四〇六。

ロ太七〇二十一。

ハ約十七〇廿一廿二。

ニ哥前一〇十。

ホ腓二〇二。

ヘ弗四〇五。

ト哥前九〇二十。

チ弗五〇廿六廿七。

リ詩廿三〇。

ヌ太五〇六。

ル撒前五〇二十一。

ヲ徒十七〇十一。

### 宗派の辯護に資するが如く見ゆる聖句

宗派分裂の非聖書的事實なることは争ふ可らざる事實なり。然れども一見其の辯護に資するが如く誤解され易き聖句なきにあらず。

#### ▲敵たはざる者は屬者也

可九〇卅八―四十に曰く「ヨハ子彼に答へて曰ひけるは、師よ我儕に從はざる者の爾の名によりて惡鬼を逐出せしを見しが、我儕に從はざるが故これを禁めたり、イエス曰ひけるは、其の人を禁むる勿れ、そは我が名により異なる能を行ひて輕易しく我を誹り得る者はあらず、我儕に敵たはざる者は我儕に屬者なり」と。此の中の「從はざる」との一句に注意し、其の正當の解釋を得たる者は、此が會

宗派の辯護に資するが如く見ゆる聖句



て宗派の辨護に資する所なきを知る可し。

抑も此處の「従はざる」は英語の Follow not にして、即ち「隨伴せざる」の意なり。決してキリストの教に従はざることを意味するには非ざる也。蓋しヨハンは彼等の一行に加はれる者の外、當時福音の役者たり得るものなきが如く考へしならん。此に於てキリストは、たとひ我儕に今隨伴せざる者と雖も「我儕に敵たばざる者は我儕に屬者」なることを告げ給ひし也。此のキリストの名によりて惡鬼を逐出したる人は、或は先に派遣せられし十二弟子等の説教を聽きて信者となり、單獨にて福音の爲めに働き居りしものなるやも知る可からず。

因に云ふ。聖書を手にし、キリストの名を呼ぶの故を以て、直にキリストに敵たはざる者、キリストに屬者の如く思はゞ大なる誤り

なり。彼等の或者は、其手にする所の聖書に於て教へらるゝ神癒を信ぜず、禮典を信ぜず、信徒の一致を信せず、却て之に反對し、且つ多くの明白なる教訓を無視しつゝあるなり。是れキリストが「我を呼びて主よ主よと曰ふ者盡く天國に入るに非ず、唯だ之に入る者は我が天に在す父の旨に遵ふ者のみ也、其の日われに語りて、主よ主よ主の名によりて教へ、主の名によりて鬼を逐ひ、主の名によりて多く異能を爲しに非ずやと云ふ者多からん、其の時かれらに告げ、我れ曾て爾曹を知らず、惡をなす者よ我を離れ去れと曰はん」と宣はれし所以、パウロが「彼等自ら神を識ると語れども其の行は之に逆る彼等は惡むべき者なり、服はざる者なり、諸の善事に就ては棄つべき者なり」と言ひし所以なり。

イ太七〇廿一—廿三。

ロ多一〇十六。

▲パウロとバルナバの激論

徒十五〇卅五以下に曰く「數日の後パウロ、バルナバに曰ひけるは、我儕さきに主の道を宣べし所の諸邑に復た往きて兄弟の光景を率とふべし、偕てバルナバはマコと名くるヨハチを伴はんと欲へり然れどもパウロは爰にバムフリヤにて己れより離れ、役事の爲め共に往かざりし此のマコを伴ふは宜からずと思ひしに因り、遂に二人の中に激論おこり、相別れバルナバはマコを伴ひクプロに渡れりパウロはシラスを選び、兄弟より己れを主の恩に托ねられて出立ちスリア及びキリキヤを経て諸教會を堅うせり」と。此の二人の中の激論は、何等教義に關するものに非ざりし事と、此の事件が相互の感情を害し、兩者の間に怨恨や敵意を挑むに至りたるが如き形跡全く

無き事とに注意せざる可からず。此の激論は單にマコに對する兩者の判斷の相違せし結果に外ならざる也。

マコはバルナバの甥なり(西四〇十)是に於てかバルナバは親戚の關係上自然の情として、當時マコに缺點ありしに拘はらず之を寛恕し、彼を伴はんことを欲せしならん。然るにパウロは「爰にバムフリヤにて己れより離れ、役事の爲め共に往かざりし此のマコを伴ふは宜しからじと思ひしに因り」之を否みたり。此の種の事柄に關して意見の相違することあるは、兩方か或は一方の判斷力の缺乏に基くものにして、聖徒と雖も必ずしも免れざる所とす。

斯くてバルナバは遂にマコを伴ひてクプロに渡りたり。然れども彼は彼の地に於てパウロと異なりたる福音を説きて自ら一派を建てたるに非ず。又たパウロはシラスを伴ひてスリア及びキリキヤ地方

に赴きたり。然れども彼は彼の地に於てバルナバと異なれる教義を傳へて自ら一派を建てたるに非ず。二人とも其の到る所に於て全く同一の福音を傳へ、以て諸教會を堅うしたる也。若し彼等にして然らざりしならば、彼等はキリストの「我儕の一なるが如く彼等も互に一にならん爲めなり」との御目的に背き、且つパウロは「爾曹みな言ふことを同うし、且つ分争なく、心を同うし、意を同うして一つに合ふべし」とコリント人に勧め、或は「爾曹念を同うし、愛心を同うし、意を合せて念ふことを一にし、我が喜びを満たしめよ、何事を思ふにも黨を結び或は虚榮を求むる心を懐く可からず、各々謙りたる心を以て互に人を己れに愈されりとせよ」とピリピ人に勧めながら、自ら先づ之を破りたるものと爲さざる可からず。何ぞ然ることある可けんや。

其の後パウロとバルナバが共に働きたることは、パウロが「唯だ我とバルナバのみ工を止むることを得ざらんや」と言ひ、又た、「十四年の後われバルナバと偕にテトスを伴ひて亦エルサレムに上る」とあるに由りて明かなり。且つ一度は同勞者を棄て去りたるが如きマコも、其の後主に誠忠を盡すに至りたるものか、パウロがテモテに與へし書中に言へることあり、曰く「なんぢマコを伴ひて偕に來れ、そは彼の職われに益あれば也」と。又た其のビレモンに與へし書中に曰く「我が勤勞の侶なるマコも同じく安を爾に問ふ」と。之を要するに彼等三人の間には、聖徒たるに相應はしからざるが如き行動全く之れなかりし也。

- イ約十七〇廿二
- コ前九〇六
- ト門廿四
- コ前一〇十
- ホ加二〇一
- ハ腓二〇二、三
- ヘ提前四〇十一

### ▲使徒等の定めたる條規

徒十六〇四に曰く「斯くて諸邑を過ぎエルサレムにある使徒及び長老等の定めたる條規を守らせんとて之を其の人々に授く」と。此の本文は、一見、彼の諸宗派の間に行はるゝ會議、及び其の會議に於て決定したる信仰個條や憲法や規則や條例などを人々に守らしむること、甚だ相似たり。是れ彼の宗派の人々が此の本文を引き、其の總會や年會や大會や委員會等の如きものを開き、諸事を議定して之を人々に守らしむることの正當なるを認めしめんと試むる所以なり。然れども若し嚴密に彼と此とを比較し來らば、其の全く類を異にするものなることを發見す可し。

此の時使徒および長老等の會合したる事情と其の狀況とは、使徒

行傳第十五章に詳かなり。即ち當時アンテオケの教會に於て、モセの慣例に従ひて割禮を受くべきや否やとの問題起りしかば、之を解決せんが爲めに、該教會はパウロとバルナバをエルサレムに送り同地の使徒および長老等と會談せしめたり。其の結果同章廿三―廿九に記するが如き書狀を造り、之を諸地方に在る異邦人の兄弟等に示すこととなりき。前掲の「條規」とは即ち此の書狀を指すものにして其が彼の諸宗派の信仰個條や憲法や規則や條例など、全然性質を異にするは勿論なりとす。而して其の時の會議の狀況を察するに、議長或は座長など、云ふが如きもの、撰ばれたる様子も無く、又た愈々決する場合に當つても、過半数とか或は三分の二以上と云ふが如き問題の起りたる様子も無し。蓋し互に謙讓謹慎、溫和なる態度を以て己の意見を陳べ、既に決するに至れば、誰れ一人異議を唱ふ

る者なかりしならん。此は廿二節に「是に於て使徒および長老たち全會と偕に其の中より人を選び、之をパウロ、バルナバと共に、アンテオケに遣はさん事を定む」とあるに由りても知らるゝ也。若し然らずんば如何で完全なる一致を保ち得べけんや。之を彼の反目疾視しつゝ、議論を戦はせ、議すでに決するも猶ほ不服の念を懐く者少なからざる諸宗派の會議の實狀に對照せば果して如何、正に天地雲泥の差ありと云ふも決して過言に非ざる可し。

或は曰はん、使徒時代に於ては、未だ人數多からざりしが故に、何事も左したる面倒なくして濟みしならんも、既に其の幾百幾千を以て數ふるに至れば、勢ひ議事法の如きものをも設けざる可からず又た多少の異論者を生ずることも免る可からずと。嗚呼果して然るか。神の子供等が事を議するに當つても、所謂議事法の如きものに

依らざる可からざるか。過半数か又は三分の二以上と云ふが如き規則に依らざれば事を決する能はざるか。半数か又は三分の一に近き人々は、不同意なるにも拘はらず、決議に屈服せしむるが如きことなかる可からざるか。思ふに宗派の雲霧中に彷徨しつゝある人々は、此等の間に對して然りと答ふるならん。然り、實に然か答へざるを得ざる也。亦た憐む可からずや。

本來神の子供等は、各地の教會より多数の委員などを撰出して、所謂總會や年會や大會の如きものを開き、以て事を議す可きに非ず凡そ教會の重要な事件は、之を適當なる少數の役員の處置に一任し、他は之に聽従すること彼の使徒時代の如くならば足れり。蓋し實際「聖靈に立てられて監督となれる」人々は、其の全群を誤り導くが如きことなればなり。予輩は米國に於て親しく其の事實を目

毀せり。而して之と異なる諸種の人爲の方法に依ることの甚だ恐なるを悟れり。

イ徒廿〇廿八

▲ペテロ、パウロに責めらる

加二〇十一—十四に曰く「ペテロ、アンテオケに至りしとき、彼に責むべき所ありしに因り、我れ當面これを詰めたり、そはヤコブより來る者の未だ至らざる前には、ペテロ異邦人と共に食したれども、彼等が至るに及びて、割禮を受けたる者を懼れ、退きて異邦人と別れたれば也、その餘のユダヤ人も彼と偕に偽りの行をなし、バルナバも遂に其の偽りの行に誘はれたり、我れ彼等が福音の眞に従ひ正しく行はざるを見、すべての人の前に於てペテロに曰ひけるは、

爾ユダヤ人の如く行はざるときは、何を異邦人を強ひてユダヤ人の例に従はせんとするや」と。此の記事に由つて多くの人は、一には聖められたる後と雖も罪を犯すを免れざるが故に、我等は到底罪なき生涯を送ること能はざるが如く説き、一には、此の時以來ペテロとパウロの間には常に意見の不一致ありしが如く想像する也。

勿論聖徒と雖も必ずしも墮落するの恐れなしとせず。而してたとへ墮落したればとて、復た悔改めて神に歸り再び聖徒たるを得べし故にペテロが此の時罪を犯したりとするも、直に之を悔改めて爾後罪なき生涯に入りしことを信するを妨げず。此のペテロの生涯と彼の常に罪を犯しつゝある所謂基督信者の生涯との間には、大なる相違ある也。況んやペテロは此の時罪を犯せし (Sinned) に非ずして、唯だ「責むべき所ありし」(Blamed) に過ぎざるに於てをや。思ふに彼

宗派の辯護に資するが如く見ゆる聖句

はパウロの詰責に遇ふて深く悟り且つ悔ひ、以て同一の誤りを再びせざるに至りしなる可し。

以上の事ありしが爲めに、兩者互に面白からぬ感情を懷き、彼の諸宗派の所謂先輩等の間に見るが如き不一致を來したる形跡全くなし。却てペテロは後年其の書中に於て曰へり「我儕の愛する兄弟パウロも其の興へられたる智慧に循ひ、曾て此の事を爾曹に書き贈れり云々」と。

敢て問ふ、誰か此の本文の中に於て、宗派の辯護の資料を發見し得るやと。

イ彼後三〇十五

### 辨 解

去る明治四十二年十二月十九日、奈良の消印ある無名の葉書本社宛て、來る、記して曰く、

若林氏よ汝の言ふ「今日幾多の所謂教會に於て教ゆる所の所謂福音は主キリストの福音に非ずして人の知慧や知識に依て作られたる加工的福音である」とは口巾ひろき言草にあらずや、予は君に忠告す、太五〇廿二、約壹三〇五を見よ。可成君の主義を主張せよ、人の主張を傷る勿れ、君大聖人と思ふ勿れ、

と。是れ「純福音」某號の紙上、若林五郎兄の「一の道」と題する一文中の一節に關して言へるもの也。一見する所、之に對して言辭を費すほどの價值なきが如しと雖も、又た翻て考ふれば、是れ蓋し或る人

々の言はんと欲する所を言ひ、爲さんと欲する所を爲したるものにして、之に對して辨解を試むるは、畢竟、多くの人々の惑を解き、其の反省を促す所以たるを知るなり。

先づ第一に我等の注意を惹くは、此の葉書の無名なることなり。素より其の發送者の聖書を讀む人たるや論を俟たず。而して又た多分自らクリスチャンと稱する人なる可し。然るに何たる輕佻ぞ、苟くも聖句を引きて事を述べんとするに當り、名を匿して誹謗的の言辭を弄せんとは。徒十七〇十一、十二に曰はずや「此の處（ベレア）の人々は、テサロニケの者よりは性情よきが故に好みて道をさし、此の如きこと果して有るか無きかを知らんとて日々に聖書をさぐれり、此の故に其の中の人おほく之を信ず」と。若し此の葉書の發送者にしてベリア人の如き性情を有する人たらんには、先づ若林兄の

言説が果して聖書の教ゆる所に合するや否やを究め、其の然らざるが如く思はるゝに當つてや、公然署名して疑義を質すべき也。然るに事茲に出でざるは誠に悲む可し。思ふに宗派の牧師傳道師中には、之に類する人決して少なからざらん。即ち吾人が一たび宗派團體の非聖書的なることを唱道するや、彼等は其の果して然るや否やを聖書に就て研究することをせず、直に反對の態度を構へ、或る少數の人々に對しては妨かに自派の爲めに辨護するも、公然其の所説を發表せざる也。眞理に不忠實なるものに非ずして何ぞや。

次に此の人は「予は君に忠告す」とて太五〇廿二を擧げたり。其の本文に曰く、「我れ爾曹に告げん、凡て其の兄弟を怒る者は審判に干らん、又た其の兄弟を愚者よといふ者は集議に干らん、又た狂妄よといふ者は地獄の火に干るべし」と。察する所彼は若林兄を以て其



の兄弟を怒る者、愚者よといふ者、狂妄よといふ者」と爲し、隨て「判審に干り、集議に干り、地獄の火に干る」者と考へしならん。元來此の本文の主意は、憤怒の情と之に伴ふ惡口を戒めたるもの也。事實上の愚者や偽善者に對し、本人をして其の事實を自覺せしめんが爲めに、或は他の人々をして其の事實を知りて警戒せしめんが爲めに、憤怒の情より非ず愛の心より、之を愚者と呼び偽善者と呼ぶも、其は決して罪にあらざるのみならず、却て善事たる也。見よキリスキは時に「愚にして瞽なる者よ」と呼び、「偽善なる學者とバリスアイの人よ、爾曹は白く塗りたる墓に似たり」と嚴責し、「蛇蝮の類よ」と呼び給ひしに非ずや。又たパウロは「爾曹を慎め」と警告せしに非ずや。知らず此の人は、キリストやパウロも「審判に干り集議に干り、地獄の火に干る」ものと考ふるにや。若しキリスト

やパウロにして左る事なしとせば、若林兄も亦た左る事なし。何となれば同兄の言ひし所のものは全く事實にして、其の之を言ひたる所以は、一に今日の所謂教會の人々をして反省せしめ、且つ眞正の福音の何たるかを知らしめんが爲めなれば也。然らば又同兄が約壹三〇十五の「凡そ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者なり」との本文中の所謂「兄弟を憎む者」にも非ざることを知る可し。

記して此に至り圖らず想起せし一事あり。其は恰かも一年以前、予輩が宗派に就て論じたるに對し、當時某派の某牧師は予輩に一書を送りて、此の如きことを論議するは太七〇一―五の聖訓に反すとの非難を加へられしこと是れなり。今茲に其の本文を擧げんに、曰く「人を議すること勿れ、恐くは爾曹も亦た議せられん、爾曹が人を議する如く己れも議せらるべし、爾曹が人を量る如く己れも量ら

るべし、なんぢ兄弟の目にある物屑を視て、己が目にある梁木を知らざるは何ぞや、己れの目に梁木のあるに如何で兄弟に對ひて、爾が目にある物屑を我に取らせよと曰ふことを得んや、偽善者よ先づ己れの目より梁木を取れ、然らば兄弟の目より物屑を取り得るやう明かに見ゆべし」と。此は少しく注意して讀む者の直に知る如く、偽善者たる者罪人たる者は、人を議し人を量るの明なきことを示され、其の人に於て若し「先づ己れの目より梁木を取り去らば、即ち救はれなば「兄弟の目より物屑を取り得るやう明かに見ゆ」るに至るべきことを教へられたるなり。斯くて「もし兄弟なんぢに罪を犯さば、その獨りある時に往きて諫めよ、もし爾の言を聽かば其の兄弟を獲べし、もし聽かずば兩三人の口によりて證をなし凡ての言を定めんが爲めに一人二人を伴ひ往き、もし彼等にも聽かずば教會に

告げよ、もし教會に聽かずば之を異邦人かつ税吏の如き者とすべし」とのキリストの御命令、「兄弟よ我儕主イエス、キリストの名によりて爾曹に命ず、我儕より受けたる傳に循はずして、妄りに歩むすべての兄弟に遠かるべし」とのパウロの警戒、「聖徒が一たび傳へられし信仰の道の爲めに力を盡して戦はん事を爾曹に勧めざるを得ず」との使徒エダの勸告に従ひ得るに至る也。若しも前記本文によりて、何人も他人の是非、善惡、正邪、曲直を議するの權なきが如く思はゞ大なる誤りなり。思ふに某牧師は此の誤解を心に懐く人ならん。次に曰く「可成君の主義を主張せよ、人の主張を傷る勿れ」と夫れ聖書の主張は一なり。此の主張に合致せざる主張は悉く之を破壊せざる可からず。パウロ曰はずや「我儕は神の教に逆ひて建てたる所の凡ての櫓と論を毀し、すべての意思を擄にしてキリストに服は

しむ」と。又た前にも引きたる如く使徒ユダは曰へり、「聖徒が一人  
び傳へられし信仰の道の爲めに力を盡して戦はんことを爾曹に勧め  
ざるを得ず」と。是れ我等が單に他の主張を傷るに止まらず、進ん  
で之を破毀せんことを力むる所以なり。

次に曰く「君大聖人と思ふ勿れ」と。此は蓋し、たとへ我等はキ  
リストに頼りて救はるゝも、到底大聖人となり得べきに非ず、故に  
我等は依然罪人たることを知らざる可からず、若し然らずして自ら  
大聖人となりたるが如く思はゞ誤りなり、との意味ならん。實際上  
宗派信者の大多数は此の如き考へを懷き、依然聖書の教訓と一致せ  
ざる生涯、即ち罪の生涯を送りつゝあるなり。

夫れ大聖人とは、讀んで字の如く、大に聖き人のこと也。而して  
キリストの救は、實に人をして大に聖からしむる也。ザカリヤ聖靈

に満たされ、キリストに就て預言して曰く「我儕を敵の手より救ひ  
我儕の生涯を聖と義に於て懼れなく主に事へしめんとなり」と。へ  
ブライ書の記者は曰く「彼は己に頼りて神にいたる者の爲めに執り  
成さんとして恒に生くれば、彼等を全く(Utremost)救ひ得るなり」と。  
即ち我等は、聖書の示す所の情件だに果さば、其の罪を悉く洗はれ  
て雪よりも白くせられ、所謂大聖人たり得る也。是れ素より我等に  
何等の功績あるが故にあらず、一にキリストの廣大なる恩恵に由る  
ものにて、我等は唯だ謙りつゝ感謝するの外なき也。

イ太廿三〇十九

ロ太廿三〇廿七

ハ太廿三〇廿三

ニ腓三〇二

ホ太十八〇十五—十七へ撒後三〇六

ト猶三

テ哥後十〇五

リ路一〇七十四

ヌ來七〇廿五

### 聖書は神の言なり

今日は實に懷疑の時代なり。多くの人の思想朦朧として恰も五里霧中に彷徨するが如く、隨て確立せる平安の無き時代なり。而して其の由て來る所を尋ねれば、聖書に對する信仰甚だ不確實なるが故なり。若し一たび聖書は神の言たることを信ずるを得、之を基礎として其の上に立つに至らば、從來の密雲濃霧は全く離散して、皎々たる真理の明月を仰ぎ得るに至るべし。

扱て此に新約全書と稱する一巻の書物あり。其の初頭に四福音書なるものありて、耶穌基督と名くる一人物の性行を記す。如何なる懷疑者と雖も、今を距ること千九百餘年前、亞細亞の西端ユダヤの國に於て、耶穌基督なる一人物の存在せし事實を疑ふこと能はざる

べし。然り、吾人は米國にワシントンありしを信ずる如く、佛國にナポレオンありしを信ずる如く、日本に徳川家康ありしを信ずる如く、ユダヤに耶穌基督ありしを信ぜざるを得ず。此は實に歴史上の事實なり。

其の耶穌基督とは果して如何なる人物なりしか。方伯ピラト公廳に於て彼を審判したる後明言して曰く、「我此人に罪あるを見ず」と。其の時より今日に至るまで、基督の性行を討査して、其の中に缺點を見出さんことを力めし者甚だ多し。而かも其の結局に於て皆先のピラトの言を繰返さざるを得ざりき。然り、耶穌基督には實に一點の非難すべき所も無かりし也。彼は實に完全なる人格なりし也。少なくとも大聖人なりし也。

聖人は決して人を欺かじ。決して人を瞞着せじ。故に聖人の言ふ

ところ爲すところは之を信ずるに足る。

基督曾て其の弟子に問ふて曰く「爾曹は我を云ひて誰とするか」と。ペテロ答へて曰く「ヨハネはキリスト活ける神の子なり」と。此の時基督はペテロの言を拒み給はざりし耳ならず、却て頗る御満足の體にて宣はく「ヨナの子シモン爾は福なり、そは血肉爾に示せるに非ず天に在す我が父なり」と。基督にして若し眞に神の子にあらずして、此の如き態度に出られたりとせば、彼は實に大瞞着家と謂ざる可からず。然れども、前に述べしが如く、彼は決して瞞着家に非ず人を欺く者に非ず。故にペテロの告白を嘉納したまひし如く、彼は神の子に相違なき也。且つ又た、彼が或る時ユダヤ人に向つて「我はアブラハムの在らざりし先より在る者なり」と云はれし事あるを見れば、愈々以て其の神の子たることを知る可し。此の基督は曰く

「われ何事をも自ら行ふこと能はず、聞く所に遵ひて審判す、我が審判は正し、そは我わが意を行ふことを求めず、我を遣はし、父の意を行ふことを求むればなり」と。又た曰く「我自ら何事をも爲さず唯だ我が父の教に従ひて此等の事を言へるを知るべし」と。又た曰く「われ爾曹に語りし言は自ら語りしに非ず我に居る父その行をなせる也」と。又た曰く「我と父とは一なり」と。此に於てか知る、基督の教は即ち神の教、基督の言は即ち神の言たることを。

次に考ふ可きは基督の弟子等の教訓なり。此等も亦た果して神の言たるべきか。基督の弟子等は三年間其の師に従ひ親しく薫陶を受けし者なり。其の時期の終り頃基督彼等に告げて曰く「我先に爾曹を友と呼べり、我爾曹に我が父より聞きし所のことを悉く告げしによる、爾曹我を選ばず、我爾曹を選べり、且つ爾曹をして往きて實

を結ばせ、其の實を保たしめんがため、又た爾曹の凡て我が名によりて父に求むる所のものを、彼をして爾曹に賜はらせんが爲めに、我爾曹を立てたり」と。又た彼死より復活せし後弟子等に告げて曰く、「父の我を遣はし、如く我も爾曹を遣さん」と。而して約翰傳第十七章の基督の祈禱中には實に左の如き語あり、曰く、「我唯だ彼等（弟子）の爲にのみ祈らず、彼等の教によりて我を信する者の爲にも祈るなり」と。然らば則ち弟子等の教訓は畢竟基督の教訓なり。故に又た神の言なり。

新約全書中にはパウロの書翰甚だ多し。彼は十二弟子等の如く基督に親炙せし者に非ず。却て一時は大に彼に反對したる者なり。然れども、彼がダマスコ行の途中に於て、忽然天光に環照せられ、鮮やかに基督の御聲を聴きし以來、彼は一人より受けず、又た教へら

れず、唯だイエス、キリストの默示によりて受けたる福音を傳ふる使徒となれり。故に彼の教訓は又た即ち神の言なり。

此に於て新約全書全體は神の言として信すべきものたるを知る。然らば舊約全書は果して如何。

舊約書中には一見はなはだ信じ難き記事多し。例へば、ヨナが三日三夜魚の腹の中に在りし事。ソドム、ゴモラの二邑が天火を以て滅ぼされし時、此處より遁れ出でたるロトの妻は、後を顧みたるが爲に鹽の柱となりし事。埃及王パロの前にてアロン杖を擲らしに蛇となりし事。モイセ手を紅海の上に伸べし時、海の水分れて左右の増となり、其の間の乾ける所をイスラエルの群衆通過せし事。モイセ杖を以て岩を撃ちしに岩より水湧き出でし事。ヨシニアの命令の下に日は其進行を止めし事。エリアは火の車に乗り天に昇りし事。

ダニエル獅子の穴に投ぜられしも、神獅子の口を閉ぢ給ひし故に、少しも害を受けざりし事等なり。此等の記事を讀んで信仰の蹟を來す人少なからず。

基督宣はく「夫れヨナが三日三夜魚の腹の中に在りし如く人の子も三日三夜地の中に在るべし」と。基督の此の言はヨナに關する記事の事實たることを證するものなり。又た宣はく「爾曹聖書に永生ありと思ひて之をしらぶ、此の聖書は我に就て證するものなり」と。此に謂ふ所の聖書とは無論舊約書の事なるが、此の中には創世記も出埃及記も、士師記も、列王記も、其他すべての豫言書も、詩歌の書も皆含まれ居るなり。又た宣はく「若しモーセを信せば我を信すべし。そはモーセ我が事を書したればなり」と。又た宣はく「モーセより凡ての豫言者を始め、凡ての聖書に於て、己れに就ての事は

解明されたり」と。此等の言に徴し、又た基督及び使徒等が、舊約諸書より引照せしこと二百回餘なる事實に徴すれば、其の神出の書たることを疑ふの餘地なかるべし。予輩は今彼得後書第壹章末部の二節を此に掲げ、以て此の篇を結ばんと欲す。曰く「先づはじめに知るべき事は、聖書のすべての豫言は、豫言者おのれの意を以て示せるに非ざるを知らんこと也、そは豫言は素より人意に由て出でしに非ず神に屬する聖人聖靈に感じて語しものなれば也」と。

- イ路二十三〇四。
- ハ約八〇五十八。
- ホ約八〇廿八。
- ト約十〇卅。
- リ約廿〇廿一。
- ル加一〇十二。
- ヲ約五〇卅九。
- ヨ路廿四〇廿七。
- 太十六〇十六。
- ニ約五〇卅。
- ヘ約十四〇十。
- チ約十五〇十五、十六。
- ヌ約十七〇二十。
- ヲ太十二〇四十。
- カ約五〇四十七。
- タ彼後一〇廿、廿一。

### 如何にして救はるべきか

「我れ救はれんが爲に何を爲すべき乎」とは、ピリビの町の獄吏があのいさきてパウロとシラスの前に出で、心の底より發せし所の問なりき。蓋し彼は此の時罪の懼るべきことを切に感じ、如何にもして之より救はれんことを希望したる也。思ふに今日罪の爲に苦しめられ、其の束縛より脱せんことを切に望みて、此の獄吏と同じ叫びを發する者少なからざる可し。

「主イエス、キリストを信ぜよ。然らば爾および爾の家族も救はるべし」と。之れ即ちパウロとシラスが獄吏に與へし答なりき。而して之を受け容れたる獄吏と其の家族は果して救はれたり。故に記して曰く「すべてに家族と共に神を信じて喜べり」と。蓋し今日の

人の救はるべき道は決して此の外に出でず。此に「主イエス、キリストを信ぜよ」とあれども、一體如何にキリストを信ず可きか。キリスト曰く「人の子の來るは多くの人に代りて生命を與へその贖とならん爲なり」と。又た曰く「これ新約の我が血にして罪を赦さんとして多くの人の爲に流す所のものなり」と。ヨハ子曰く「神われらをして愛し我儕の罪の爲に其の子を遣はして挽回の祭物とせり」と。ペテロ曰く「かれ木の上に懸りて我儕の罪を己が身に任ひ給へり」と。パウロ曰く「只キリスト、イエスの贖によりて神の恩をうけ功なくして義とせらるゝなり」と。又た曰く「彼れ萬人に代り己を棄て、贖となせり」と。即ち此等の聖句によりて知る如く、我等の凡ての罪はキリストの死に頼りて既に贖はれたる事を信ずる也。此の信仰こそ實に我等を救ふなり。故に曰く「不義なる者を義とする神を信



じて其の信仰を義とせられたり」と。又た曰く「我儕信仰によりて義とせられたれば神と和ぐことを得たり」と。然り我等を救ふものは實に此の信仰なり。然れども其の信仰たるや單に頭腦を以て信ずるの信仰たる可からず。必ずや心を以て信ずるの信仰たらざる可からず。さればこそ「それ人は心に信じて義とせらる」と云へる也。此の心を以て信ずる信仰を得る爲めに、必然我等の爲すべきことは悔改なり。故にキリストは「爾曹悔改めて福音を信ぜよ」と宣はれて、福音を信じて悔改めよ、とは宣はれざりき、蓋し悔改めざる者に於ては、到底心を以て福音を信ずること能はざるが故なり。即ち悔改は救に入るの門なり。さればペテロは「爾曹おのゝ悔改めて罪の赦を得んが爲めにイエス、キリストの名によりてバプテスマを受けよ」と説き「爾曹罪をくひ心を改めて其の罪を消さるゝことを

をせよ」と勧めたり。パウロも亦た「今は何處の人にも皆悔改むることを命じ給ふなり」と言へり。

眞に悔改めたる者は第一其の罪を告白せざる可からず。曰く「其の罪をかくす者は榮ゆることなし、然れど言ひ顯はして之を離るゝ者は憐憫を受けん」と。又た曰く「若し己の罪を言ひあらはさば、神は信實なる公義者なるが故に、必ず我儕の罪をゆるし、凡ての不義より我儕を潔むべし」と。此の「言ひあらはし」とは、單に自ら罪人たるを認むるに止まらず、堅く罪を棄つるの決心をなし、神の前に悉く之を告白することなり。又た若し或人に對して惡を行ひたることとあらば、之を其の人に告白して赦免を請ふことなり。第二人の罪を免さざる可からず。曰く「爾曹もし人の罪を免さば天に在ます爾曹の父も亦た爾曹を免し給はん、されど若し人の罪を

免さずば、爾曹の父も爾曹の罪を免し給はざるべし」と。即ち己に對して如何なる害を加へたる人と雖も、心より之を免し、決して悪感情や敵意や怨恨を胸中に懐く可からず。

第三賠償を實行せざる可からず。曰く「悪人質物を戻し、其の奪ひしものを還し、悪をなさずして生命の憲法にあゆみなば、必ず生さん死なざるべし」と。即ち或は欺き或は盗みて、自ら取る可からざるものを取りたることあらば、之を被害者に告白して其の賠償を爲さざる可からず。若し一時に之を賠償すること能はざる場合には、必ず然る可き方法を盡して、公義の回復を全ふせざる可からず。ザアカイは即ち賠償の模範なり。記して曰く「ザアカイ起ちて、主よわが所有の半ばを貧者に施さん、若しわれ誣ひ訴へて人より取りたる所あらば四倍にして之を償ふべし」と。

此の三つのものは、畢竟、眞の「悔改に符へる果」なり。此等の果に加ふるに先に記するが如き信仰を以てせば、何人と雖も必ず救はる可し。ウイエス、キリストを信するに由りて、其の義を神は凡ての信者に賜ふて區別なし。男にても、女にても、老人にても、青年にても、學者にても、無學者にても、過去に於て如何なる大罪を犯したる人にてても、皆な救はる可し。之に反して若し以上の情件を全ふせざるに於ては、假令神學者にても、哲學者にても、決して救はるゝこと能はざる也。

眞に悔改め、キリストの贖罪を信じ、凡ての罪を赦されて、茲に愈々純潔無垢の身となり。良心の苛責去りて無限の平安入り來り、永遠の希望満々たるに及んでや、其の喜びの大なること譬ふるに物無し。彼のロックフェラーやカーチギーの如き人々が、其の幾億萬

如何にして救はるべきか

一三四

弗と云ふ財産を擧げ來つて、此の貴重の實驗との交換を申込みりとするも、到底之れに應ずる氣にならざる可し。

偕て我等は何時此の實驗を我が所有となすべきか。曰く今!! 今今は恵みの時なり、今は救ひの日なり。此の今と云ふ時こそ即ち救ひに入るべき時なり。「善は急げ」。決して之を延期す可からず。一刻延期すれば一刻の損あり、一日延期すれば一日の損あり。而已ならず其の一刻や一日の延期が、遂に永遠の延期となり、折角來りし救ひの機會を取り損ひ了るやも知る可からず。戒めざる可けんや。

イ徒十六〇卅

ロ徒十六〇卅一

ハ徒十六〇卅四

ニ太廿〇廿八

ホ太廿六〇廿八

ヘ約壹四〇十

ト彼前二〇廿四

チ羅三〇廿四

リ提前二〇六

ヌ羅四〇五

ル羅五〇一

テ羅十〇十

ヲ可一〇十五

カ徒二〇卅八

ヨ徒三〇十九

タ徒十七〇卅

レ箴廿八〇十三

ソ約壹一〇九

ツ太六〇十四、十五

子結卅三〇十五

ナ路十九〇八

ラ路三〇八

ム羅三〇廿二

ウ哥後六〇二

如何にして救はるべきか

一三五

### 聖潔の教義

罪に二種の形状あり、一を現罪とし一を原罪とす。何れもキリストの犠牲に由りて除かるゝものなりと雖も、其の除かるゝの道たるや自ら異なれり、即ち現罪は悔改と信仰に由りて除かれ、原罪は献身と信仰に由りて除かるゝ也。必然の順序として前者は先に來り後者は之に次ぐべし。此の事實はキリストの「すべて實をむすぶ枝は之を潔む、そは益々繁く實を結ばしめん爲めなり」との聖言中に明示せらる。此に「實を結ぶ枝」とは即ち既に現罪を除かれて新に生れたる者の事なり。神は新に生れて神の國に入りたる者をして「まします繁く實を結ばしめん爲め」に「之を潔め」給ふなり。是れパウロが「我儕信仰に由りて義とせられたれば神と和ぐことを得たり

此は我が主イエス、キリストに頼りてなり、亦た我儕彼れにより信仰によりて、今居るところの恩に入ることを得、且つ神の榮を望みて欣喜をなす」と言ひし所以なり。此の「今居るところの恩」とは即ち潔められたる情態を指すなり。

今キリストの弟子等の實例に徴して考ふる所ある可し。或る時一イエス十二の弟子に曰ひけるは爾曹も亦た去らんと意ふや、シモンペテロ答へけるは主よ我儕は誰に往かんや、永生の言を有る者は爾なり、又た我儕信じて知る爾は活ける神の子キリストなり」と。此の如き信仰ある者の新に生れし者なることはヨハネの言によりて明かなり、曰く「彼を受け其の名を信ぜし者には權を賜ひて之を神の子と爲せり、斯る人は血脈に由るに非ず、情慾に由るに非ず、人の意に由るに非ず、唯だ神に由りて生れし也」と。又た曰く「凡そイ

エスをキリストと信ぜし者は神に由りて生れたる也」と。實にキリストは「其の十二弟子を呼び彼等に汚れたる鬼を逐出し、又た凡ての病すべての疾を醫す權を賜へり」。而して命ずらく「往きて天國近に在りと宣べ傳へよ、病の者を醫し、癩病を潔くし、死たる者を甦らせ、鬼を逐出すことをせよ、爾曹價なしに受けたれば亦た價なしに施すべし」と。蓋し彼等は既に救はれし者なるが故に、此の如き任命に堪へし也。特に「われ世の屬に非ざる如く彼等も世の屬に非ず」とのキリストの御一言は最も明白に弟子等の新生を證するものなり。且つ又たキリストは彼の七十人に對ひて「我なんぢらに蛇蝎を踏み又た敵のすべての權を制ふる權威を授けたり、必ず爾曹を害ふ者なし、然れども惡鬼の爾曹に服し、事は喜びとする勿れ、爾曹が名の天に記されしを喜びとすべし」と宣へり。其の名の天に記さ

れたる者は即ち新に生れたる者なり。言ひ換ふれば現罪を除かれたる者なり。

然れども弟子等の原罪は未だ除かれざりき。抑も原罪とはアダムの墮落の結果の全人類に及びたるもの、謂にして、凡ての現罪の根なり。此の根の全く除かれざる間は、往々其の萌芽の發生するを免れず。此を以て弟子等の中には時に「誰か大ならんとの争あり」と又たゼベダイの子ヤコブとヨハ子はイエスに來りて「爾曹榮を得んとし我儕の一人を其の右に一人を其の左に座せしめよ」と求めたり。而して二十人の弟子これを聞きてヤコブとヨハ子を憤れり。イエスの將に捕へられんとする時に當つて「シモン、ペテロ劔を佩びたりしが之を抜きて祭司の長の僕を撃ちて其の右の耳を削りおとせり」。此等の事實は、彼等の中に未だ驕慢、嫉妬、憤怒等の罪根存せしこと

を示すにあらずや。而して此の如き罪根の存する所には、自ら分裂あるを免れざる也。是れキリストが彼等の「皆一にならん爲め」に「爾の眞理を以て彼等を潔め給へ」と祈りたまひし所以なり。夫れ人の心より原罪を除き之を潔むる者は聖靈なり。乃ちパウロは曰く「イエス、キリストの僕となりて神の福音の祭をなし、獻ぐる所の異邦人を聖靈に由りて潔まらしめ、神の意旨に適はせん爲めなり」と。弟子等はペンテコステの日に於て聖靈を受けたり。此に於て分裂の素因たる驕慢、嫉妬、憤怒等の如きものは全く除かれ、悉く一致結合するに至りたり。乃ち記して曰く「信者は皆な心を一にし意を一にして誰れ一人その所有を己が物と云ふことなく凡て之を共に有てり」と。ペンテコステ以前の弟子等と其の後の彼等との間に、性格の變化を見ること此の如し。

信者となりし後に聖靈を受くべきものなることは、ピリポよりキリストの事を聞きたる彼のサマリヤの邑の人々に於ても其の實例を見るを得べし。記して曰く「彼等神の國およびイエス、キリストの名につきて福音を宣ぶるピリポを信ぜしかば、男女ともにバプテスマを受く」と。即ち彼等は此の時信者となりし也。之に次で曰く「エルサレムに居る使徒等、サマリヤ已に神の道を受けたりと聞きてペテロとヨハネを彼處に遣す、此の二人の者くだりて彼等が聖靈を受けん爲めに祈れり、そは彼等たゞ主イエスの名に入れられバプテスマを受けしのみにて未だ其の一人にも聖靈降らざりしに因る、此の時二人の者手を彼等の上に置きければ彼等聖靈を受けたり」と。此に一言するの要あるが如く覺ゆるは、たとへ此の世に於て原罪を除かれずとも、若し新に生れて神の子供たる以上は、天國に入る

に差支なしと云ふ事は是れなり。小兒は勿論未だ原罪を除かれざるものなり。故に往々無意識の間に惡の傾向を示すことあり。假令へば人に打たれし時怒つて之を打ち返すが如し。然るにも拘らずキリストは宣はく「幼兒を我に來らせよ、彼等を禁ずる勿れ、神の國に居るものは斯の如き者なり」と。蓋し小兒の原罪はキリストの犠牲に由つて贖はるゝなり。此の小兒漸く成長して事物の判断を爲し得るに至り、惡の惡たるを知りつゝ之を行ふに當つて、茲に現罪を形成するなり。此の現罪は、前にも言へる如く悔改と信仰に由つて除かれ、以て新に生るゝものとす。新に生れし者の原罪がキリストの犠牲に由つて贖はるゝは全く小兒の場合と同じ。

然らば則ち此の世に於て原罪を除かるゝの必要何れにありやと云ふに、他なし、新生の状態を保ちて罪を犯さざらんが爲めなり。原

罪すなはち罪の根を滅絶せずして、罪無き生涯を送らんことは極めて難し。蓋し惡魔の誘惑に對抗するの力弱く、往々罪の芽を發して現罪を形成し易ければ也。

此に至つて最も緊要なる問は起る、曰く、然らば原罪を除かるゝの道如何と。之に答ふる所左の如し。

第一其の身を神の意に適ふ聖き活ける祭物となして神に獻げよ（ローマ十二〇一）。此に謂ふ所の「聖き」とは即ち聖別の義なり。モーセの律法によればエホバに納めたる奉納物は皆なエホバに至聖物たりき（利二十六）。我等は先づ此の身をエホバに至聖物たるべく奉納せざる可からず。他語を以て之を言へば、食ふにも飲むにも何事を行ふにも凡て神の榮を顯はすやうに行はざる可からず（哥前）。十〇三十一）。凡そキリストの命じ給ひし言ならば悉く之を守るの決

心なかる可からず (太二十八〇二十)。斯くて

第二イエスの名によりて聖靈の降臨を神に求めよ (約十六〇二十)

三)。キリスト宣はく「爾曹悪しき者ながら善き賜を其の兒童に與

ふるを知る、まして天に在す父は求むる者に聖靈を與へざらんや」

と。次に

第三求めし所のものは與へられたることを信ぜよ (可十一〇二十

四)。是れ甚だ大切なる事なり。單に此の一事を缺くが爲めに貴重

の恩恵を受けざるもの多し。之れ信仰は望む所を疑はず、未だ見

ざる所を憑據とするもの也。信仰は素より感情の上に立つものに非

ず、意志の働きなり。感情の如何は顧みるを要せず、唯だ意志を以

て確く信ぜべし。

凡そ第一を全うしたる者は又た第二を爲し得べく、第一第二を全

うしたる者は又た第三を全うするを得べし。此に於て其の人は聖靈を受け、罪根を滅絶し、誘悪に勝つ力を増し加へられ、更に進んだる基督信徒の生涯に入る可き也。

- イ約十五〇二
- ハ約六〇六十七—六十九
- ホ約壹五〇一
- ト太十〇七、八
- チ路十〇十九、二十
- ヌ可十〇三十七
- テ約十八〇十
- カ約十七〇十七
- タ徒四〇三十二
- ソ徒八〇十四—十七
- 子路十一〇十三
- ラ來十一〇六
- ロ羅五〇一、二
- ニ約一〇十二、十三
- ヘ太十〇一
- メ約十七〇十六
- リ可九〇二十四
- ル可十〇四十三
- ソ約十七〇二十一
- ヨ羅十五〇十六
- レ徒八〇十二
- ツ可十〇十四
- ナ來十一〇一



### 何故病に罹る乎

無病息災ならんことは、素より萬人の所願なれども、事實上、全く病苦の経験なきものとしては千百中僅に一二に過ぎざるべし、今この疾病の原因に就て尋ねるに、

一、疾病は必ずしも各個人の罪の結果と見做すべからず。是れ信仰より出づる祈りは病者を救ふべし、主これを起さん、若し罪を犯し、ことあらば救されん」との一節の中に「若し」の一語ある所以なり。而して實際義人聖者の病に罹りたる例少なからず。彼のヨブは、其の人と爲り完全かつ正しくして神を畏れ惡に遠かる者」なりしが、神はサタンの彼を惱ますことを許し給ひたり（ヨブが歴史上の人物なりしことは雅五〇十一によりて明らか也）。又た「ヒゼキヤ

はイスラエルの神エホバを頼めり、是を以て彼の後にも、彼の先にも、エダの諸の王等の中に、彼の如きものなかりき、即ち彼は固くエホバに身をよせて之に従ふことをやめず、エホバがモーセに命じ給ひしその誠命を守もれり」然れども「ヒゼキヤ病みて死なんとせしことあり」。此等は畢竟その信仰によりて癒さるゝことを證明し、且つ世をして如何なる逆境にあるも猶ほ神に信頼するの篤信家あるを知らしめんが爲め也。

二、信徒たるものにして或は過失あり、或は欠點あるに當てや、神は之を矯正し、我等に益を得しめて其の聖潔に與らせんが爲めに、懲罰の一種として、其の病に罹ることを許し給ふことあり「困苦にあひたりしは我によきことなり、此によりて我なんぢの律法を學びえたり」とは、蓋し此の種の人の経験なるべし。

三、罪人および墮落者をして、己を省み神を求めしむるが爲めに神は往々彼等の病に罹るを許し給ふことあり。彼の床に臥したるまゝ人々に昇かれ來つて癒されたる癱瘋患者は、即ち其の一例なり。記して曰く「イエス彼等が信ずるを見て癱瘋の者に曰ひけるは、子よ心安かれ爾の罪赦されたり」と。思ふに此の患者の病は何等かの罪の結果にして、彼れ自身は能く之を知り、其の罪の赦さるゝと共に其の病をも癒されんことを願ひしならん。

四、極悪非道なる者、或は神を穢す所の者は、時として目のあたり天罰を蒙り、嚴しく惱まざるゝことあり。今その實例の一二を左に擧ぐべし、曰く「ヘロデその定めたる日に於て王服を着け、位に坐し、彼等に對ひて語れり、民聲を揚げいひけるは、此は神の聲なり人の聲に非ず、ヘロデ榮を神に歸せざるにより主の使者たち

彼を撃ちしかば、彼は蟲の爲めに噛まれて氣絶ゆ」と。又た曰く「時に方伯バルナバとパウロを召きて神の道を聽かんことを求む、然るに彼の卜者エルマス二人の者に敵ひ、方伯をして信ずることなからしめんとせり、サウロ一名はパウロ聖靈に満され目を注めて彼を視曰ひけるは、噫すべての詭譎と奸惡にて盈るもの、惡魔の子、すべての義しきことの敵よ、爾主の直なる道を枉げて止まざらんとす視よ主の手いま爾の上にあり、なんぢ瞽となり暫らく日を見ざるべし、即ち彼の目かすみ暗みて己を手引せんとする者を求めさまよへり」と。

五、キリストの爲に働く者も、其の働きの劇しさ所より病に罹ることあるべし。エパフロデトに就てパウロは曰く「かれ己が曩に病みたる事の爾曹に聞えしを以て、深く爾曹すべての人を戀ひ慕ひ且

つ愛悶をれば也、實に彼は病に遇ひて殆んど死に近けり、されど神これを憐み給へり……然れば爾曹主にあり喜びて彼を迎へ且つ此の如き人を尊ぶべし、そは彼は己が命を顧みず死なんとするばかりキリストの爲めに働き、爾曹が我を助くるところの缺を補ひたればなり」と。

六、悪鬼の爲めに惱まされし者あることは、聖書中に明に記す所なるが、世人は大抵これ唯彼の時代に限られたるもの、如く思惟せり。然れども實際同じ悪鬼は、今日も猶ほ多くの人を惱ましつゝあるなり。而して其の癒されんが爲めには、先づキリストの名により悪鬼を逐出さざる可からず。然らずんば到底治することなかるべし。七、其他の多くの疾病は、飲酒、喫煙、過食、及び茶珈琲を用ゆること、或は青春期に於ける秘密醜行、或は放蕩等によりて、自ら

招けるものなるべし。今日病院癲狂院等にある患者の多数は、所詮各自の不攝生不品行の結果の爲めに惱みつゝあるものと見るも、恐らくは大過なからん。

偕て其原因は上記中の何れに在るにもせよ、或は切に求め、或は罪あらば之を悔改め、以て且つ祈り且つ信せば、神の大能によりて必ず癒さるべし。故にヤコブは曰く「爾曹のうち誰か病める者ある乎、あらば教會の長老等を招くべし、彼等主の名によりて其の人に膏を注ぎ之が爲めに祈らん、それ信仰より出づる祈りは病者を救ふべし、主これを起さん、若し罪を犯しゝことあらば赦されん、爾曹たがひに過ちを言ひあらはし、且つ病を癒さるゝことを得ん爲めに互に祈るべし、義者の篤き祈りは力ある者なり」と。又たペテロは曰く「彼のむちうたれしに因りて爾曹醫されたり」と。又たダビデ

何故病に罹る乎

一五二

は曰く「エホバはなんぢがすべての不義をゆるし、汝のすべての病をいやし」と。

イ雅五〇十五。

ロ伯一〇一。

ハ王下十八〇五。

ニ王下廿〇一。

ホ來十二〇十。

ヘ詩百十九〇七十一。

ト太九〇二。

チ徒十二〇廿一—廿三。

リ徒十三〇七—十二。

ヌ腓二〇廿六—卅。

ル雅五〇十四、十五。

ヲ彼前二〇廿四

ヲ詩百三〇三。

### 神 癒

米國インデアナ州アンダソン市に於て發行しつゝあるゴスペル、トランベツト紙主筆イー、イー、バイラム氏、數年前、世界巡遊を試み、其の旅行記を出版せられたり。該書中に、氏が香港より長崎に來りし時、船中に於て、英語に堪能なる某日本紳士と敎談を交へたることを記し、其の末部に至つて曰く、彼は予が神癒を信ずるものなることを知るや、爾後再び來つて語らざりしと。蓋し此の紳士はバイラム氏をば一種の迷信家と見たるが故なるべし。

世人は大抵病氣は唯だ醫者に頼つてのみ癒さるべきものゝ如く思へり。是を以て神の能に頼つて其の癒さるゝことを信ずる者に遇へば、直に之を迷信家と爲す也。是れ或は從來神ならぬ神や佛に加持

神 癒

一五三

祈禱を捧げて、病氣の快癒を願ふ眞の迷信家あるを見聞して、之と同一視するにも由るべく、或は從來宣教師も牧師も殆んど之を教へざるのみならず、却て宣教師中には、往々醫者を兼ねるものさへあるが故に、基督教は本來神癒を説かざるものゝ如く考ふるにも由るべく、或は醫藥を用ゐつゝ神の佑助を祈るを以て、至當となす所の自分勝手の説を立つるにも由るべく、或は科學萬能を妄信するにも由るなるべし。

さて世人は何と考ふるにもせよ、從來の宣教師牧師は何と教ゆるにもせよ、聖書は之に就て如何に教ゆるかを究めざる可からず。蓋し聖書は吾人の信仰行為の唯一の典據たれば也。

イザヤはキリストに就て預言して曰く「まことに彼は我儕の病患を治ひ、我儕のかなしみを擔へり、然るにわれら思へらく、彼はせ

められ神にうたれ苦しめらるゝなりと、彼はわれらの愆のために碎かれ、みづから懲罰を受けて我儕に平安を興ふ、そのうたれし瘡によりて我儕はいやされたり」と。多くの人は此の預言によりて、キリストは我儕の靈魂の贖主たることを知ると雖も、彼は實に又我儕の肉體の贖主たることを知らざる也。是れ全く最後の「そのうたれし瘡によりて我儕は癒されたり」との一句をば深く注意せずして讀過するに由るものとす。

見よ、此の預言は適切に應驗したり。すなはちヨイエス、ガリラヤを偏く巡り其の會堂にて教をなし、天國の福音を宣べ傳へ、かつ民の中なる諸の病もろくの病を醫しぬ、その聲名あまねくスリヤに播りしかば人々すべての患へる者、さまざまの病、また痛み惱めるもの、あるひは鬼に憑れたる者、癩癩、中風の病に罹れる者を彼

に携れ來りければ之を醫せり」と。更に他の所に記して曰く、「日暮れたるとき、人々鬼に憑れたるものを多く携れ來りければ、イエス言にて鬼を逐出し、病ある者を悉く醫せり」と。之に次で馬太は曰く、「預言者イザヤによりて自ら我儕の恙を受け、我儕の病を負ふと曰ひたまひしに應はせん爲めなり」と。此の事實が今日に至るまで殆んど看過されたるは、實に奇と謂はざるべからず。

キリストは御自身にて病を癒したまひしのみならず、彼の十二弟子にも其の能力を與へたまひたり、曰く「キイエスその十二弟子を呼び、彼等に汚れたる鬼を逐出し又すべての病すべての疾を醫す權を賜へり」と。而して彼等は之を實行したり、乃ち記して曰く「弟子たち偏く福音を宣べ傳ふ、主も亦た彼等に力を協せ其従ふ所の奇跡によりて道を堅うし給へり」と。又た曰く「イエスの名は其の名を

信ずるによりて爾曹の見るところ識るところの此人を健勁せり、かくイエスに由れる信仰は爾曹すべての人の前に於て此の人を全く癒したり」と又た曰く「多くの休徴と奇なる跡は、使徒たちの手に由りて民の間に行はれたり、又た彼等みな心を合せてソロモンの廊に居る、餘の者は敢て之に近づかさざりき、然れども民は彼等を尊み、男女とも信ずる者ます、多く主に屬さぬ、斯て人々病める者を携へて衢に出で、寢台また床の上に置けり、そはペテロの來りしときその影に蔽はるゝ者あらんかと思へばなり、また許多の人々四方の諸邑より病める者および悪鬼に難されたる者を携へてエルサレムに來り悉く癒されたり」と。又た曰く「彼等は久しく彼處に留り、主によりて憚らず道を傳ふ、主また彼等の手に休徴と奇なる跡を行はしめて其の恩の道を證せり」と。

キリストは又た彼の七十人を立て、之を遣さんとするに當つて曰く「邑の中なる病の者を醫せ、亦た人々に神の國は爾曹に近けりと曰へ」と。而して彼等は之を實行したり、乃ち記して曰く「七十人喜び返りて曰ひけるは、主よ悪鬼さへも爾の名によりて我儕に服せり、イエス曰ひけるは我れ電の如くサタンの天より墜るを見し、我れ爾曹に蛇蝎を踐み、また敵のすべての權を制ふる權威を授けたり必ず爾曹を害ふ者なし、然れども悪鬼の爾曹に服し、事を喜びとする勿れ、爾曹の名が天に録されしを喜びとすべし」と。又たステバノも同じ能を興へられたり、曰く「ステバノ恩と能力に満ちて奇なる跡と大なる休徴を民の中に行へり」と。又たパウロも同じ能を興へられたり、曰く「マルステラに一人の足弱き者座しゐたり、彼は生來の跛者にて未だ歩みしことなし、此の人パウロの語るを聴き居り

しが、パウロ目を注めて其の癒さるべき信仰あるを見、大聲に曰ひけるは爾の足にて正しく立てよ、彼おどり上りてあゆめり」と。

其の外教會の長老にも同じ能を興へられたり、曰く「爾曹のうち誰か病める者あるかあらば教會の長老等を招くべし、彼等主の名によりて其の人に膏をそそぎ、之が爲に祈らん、それ信仰より出る祈禱は病める者を救ふべし、主これを起さん」と。しかのみならず凡ての信者に同じ能を興へらるべき約束あり、曰く「信する者には左の如き奇跡したかふべし、我が名によりて悪鬼を逐出し異邦の方言をいひ、また蛇をとらへ毒を飲むとも害なく、又た手を病の者につけなば即ち癒へん」と。

次に如何にして癒さるかと云ふに、先づ病者に於て信仰なかる可からず。之に就ては太九〇十八―二十二。同廿七、三十。可五〇

廿五―卅四。同廿二、廿三、卅五―四十二を見るべし。

又他人の信仰によりて癒されたる實例あり、即ち太八〇五―十

三。同九〇二。可九〇十六―廿七。約四〇四十六―五十三を見よ。

次に即時に癒されたる實例あり、路四〇四十。徒五〇十六の如し。

又即時ならざる實例あり、路十七〇十四の如し。又沮喪せずし

て煩求するの必要なる場合あり、太十五〇二十、二十八の如し。

夫れ「イエス、キリストは昨日も今日も永遠變らざる也」。即ち今

日も昔日と同じ能を有し給ひ、昔日信ずる者を癒し給ひし如く、今

日も尚ほ信ずる者を癒し給ふなり。信ぜよ、信ぜよ、而して求めよ、

求めて主の恩恵を受けよ。

イ 賽五十三〇四、五〇

ロ 太四〇廿三、廿四。

ハ 太八〇十六。

ニ 太八〇十七。

ホ 太十〇一。

ヘ 可十六〇二十。

ト 徒三〇十六。

チ 徒五〇十二―十六。

リ 徒十四〇三。

ヌ 路十〇九。

ル 路十〇十七、廿。

テ 徒六〇八。

ヲ 徒十四〇八―十。

カ 雅五〇十四、十五。

ヨ 可十六〇十七、十八。

タ 來十三〇八



### 神癒を否定するが如く見ゆる聖句

聖書が神癒を教ゆることは頗る明白なり。然れども時に之を否定するが如く見ゆる聖句なきに非ず。

#### ▲病ある者醫者を需む

太九〇十二に曰く「イエス彼等に曰ひけるは強康なる者は醫者の助を需めず唯だ病ある者これを需む」と。之に由つて基督は病ある者の醫者を需むることを是認し給ひしが如く思ふ人少なからず。果して然る乎。

夫れ當時醫者ありしは事實なり、爰に十二年血漏を患ひたる婦あり、此の婦おほくの醫者の爲めに甚だ苦しめられ、其の所有を盡く

費しけれども何の益もなく却て悪しかりしが」とあるによりて之を知るべし。基督は即ち其の事實を譬喩としてパリサイの人に告げ給ひしのみ。

實際に於ては爲すべからざる事をも、基督は之を譬喩として用ゐ給ひし例少なからず。今一例を挙げんか、又また天國は畑に藏れたる寶の如し、人みいださば之を秘し、喜び歸り、其の所有を盡く賣りて其の畑を買ふなり」と。此に「之を秘し」とあるは素より善からざる行爲なり。基督が之を是認し給ふべき理由なし。彼のラルデ氏之に就て註釋して曰く「ユダヤ地方の習俗に、若し此の如き寶財を發見せしことあるも、必ず之を畑主の所有と爲せり、然れば畑主に其の寶財を發見することを告げずして、密に其の地所を買得するは固より道理に合はざる方便なりしかども、キリストは此の如き事の

理非を悉く此處に詳論し給はず、唯だ當時其地方に流行する風俗に従ひて其の寶財を求むるの熱心に譬へしなり」と。基督が病ある者の醫者を需むる事實を譬喩に取り給ひしも、全く之と同一の事情なりとす。

基督は曾て己れに來れる病者に對して其の治療を醫者に請ふべしと告げ給ひしことなし。記して曰く「イエス、ガリラヤを偏く巡り其の會堂にて教をなし、天國の福音を宣べ傳へ、且つ民の中なる諸の病もろ／＼の疾を醫しぬ、その聲名あまねくスリヤに播りしかば人々すべての患へる者、萬殊の病、また痛み惱める者、或は鬼に憑れたる者、癩癩、癱瘋の病に罹れる者を彼に携來りければ之を醫せり」と。此は實に基督御自身最大醫たることを證する者にあらずや

イ可五〇廿五、廿六。

ロ太十三〇四十四。

ハ太四〇廿三、廿四。

### ▲パウロの刺

哥後十二〇七一九に曰く「また賜はりし多くの默示に因りて我が傲ることなからん爲めに、一の刺を我が肉體に予ふ、即ち我が傲ることなからんが爲めに我を撃つサタンの使者なり、我これが爲めに三次主に之を我より離んことを求めたり、我に言ひ給ひけるは我が恩なんぢに足れり、そは我が能は弱さに於て全くなれば也、この故に寧ろ欣びて自己の弱に誇らん、是れキリストの能われに寓らん爲めなり」と。此處の所謂「一の刺」を以てパウロの身にありし一の疾病の如く考ふる者多く、或人々は加四〇十五に由りて彼は眼病を煩ひしならんと想像せり。然れども注意深き研究の結果は、之れ決

神癒を否定するが如く見ゆる聖句

して眼病にも非ず、又た其の他の疾病にも非ざることを見出すべし。先づ七節の「刺」は即ち九節の「弱」なるを知るべし。而してパウロは他の所に於て如何なる場合に此の「弱」なる語を用ひるかを検するに、哥後十一〇廿三より讀み來り三十に至りて同一の語あるを發見す。此處の「弱」が其の前に列記せる多難を意味するものなることは、何人も承認する所ならん。加四〇十三中の「よわき」及び其の次節中の「爾曹を試むる者」も全く同一事にして、畢竟パウロの身に常の迫害の輻湊せるを云ふなり。此に於てか知る、パウロの所謂「一の刺」は即ち其の受くる迫害を意味せしものなることを。尙ほ民卅三〇五十五、書廿三〇十三、結廿八〇廿四等を參看すべし

▲ 醫者ルカ

西四〇十三に曰く「我儕が愛する醫者ルカ及びデマス爾曹に安を問ふ」と。ルカが救はれて福音の役者となる前の職業は醫者なりしならん。故にパウロはかれを「愛する醫者ルカ」と呼びたり。然れども彼が醫者として働きたる形跡全くなし。

徒廿〇七―十二に曰く「一週の首の日われらパンを擘く爲めに集りしが、次の日出立たん事を意ひ、彼等に道をかたり、語りつゞけて夜半に至れり、彼等が集れる樓に多くの燈あり、ユテコと名くる一人の少年窓に倚りて坐し熟睡り居りしが、パウロの道を語れること久しかりければ、彼れ匪に因りて三階より墮つ、之を扶け起し、に既に死ねり、パウロ下りて其の上に伏し之を抱きて曰ひけるは、爾曹愛へ咄ぐ勿れ、此の人の生命は中にあり、斯くてパウロ復た上りパンを擘きて食ひ久しく彼等と語り、天明に及びて出立てり、人

々この少年を携へ、其の活けるを見て甚だ慰めり」と使徒行傳がルカ  
 カの著述たることは何人も疑はざる所なり。而して此に「われら」とあるは、ルカも其の場に居りし一人なることを證すべし。然るに  
 ユテコなる一少年の過つて三階の窓より落つるや、ルカは走り來つ  
 て薬を與へ、或は治療を施したる形跡なく（若し彼が醫者としてバ  
 ウロに従ひしならば、然か爲すは當然なるべきに）唯だ「パウロ下  
 りて其上に伏し之を抱き」たることを記するのみ。

又た同廿八〇七―十に曰く「島の長をプブリヲと名く、此の邊に  
 己が有る田地あり、彼れ我儕を迎へて懇懇に三日宿らせたり、時に  
 プブリヲの父熱と痢病を患ひて臥し居りしが、パウロ其の所に至り、  
 祈りて手を其の上に按き之を醫せり、此の事ありしかば、島にある  
 所の外の病者等も來りて醫さるゝことを得たり、彼等禮を厚くして

我儕を敬ひ、又た舟出の時に臨みて我儕が無てかなはぬ物を贈れり」と  
 此處にもルカが醫者として盡せしことを少しも記さず、凡ての  
 病人は唯だ祈りに由つて醫されたり。而して「彼等禮を厚くして我  
 儕を敬ひ」とあるは、全くキリストの使徒、救靈と神癒の福音の役  
 者として然りしのみ。

▲テモテの葡萄酒

提前五〇廿三に曰く「爾の胃のため及び爾しばく疾ふによりて  
 恒に水を飲むこと勿れ、少しく葡萄酒を用ふべし」と。彼の土の或  
 地方の水は、其の質甚だ好からずして胃を害するが故に、人民は一  
 般に其の少量を用ゐ、而して該地方の産物たる葡萄酒を多く食し、其  
 の季節にあらざる時は、豫じめ醱酵せざるやうに蓄へられたる葡萄

の液汁を飲用する習慣なりしと云ふ。パウロがテモテに勧めたる所謂葡萄酒は即ち此の液汁なり。以て其藥品にあらずして唯だ滋養物たるを知るべし。

序でに聖書中の酒に就て一言せん。蓋し之に二種あり、即ち一は醸酵したるものにして、一は醸酵せざるものなり。前者は「酒は人をして嘲らせ、濃酒は人をして騒がしむ、之に迷はざる者は無智なり」或は「禍害ある者は誰ぞ、憂愁ある者は誰ぞ、争端をなす者は誰ぞ、煩慮ある者は誰ぞ、故なくして傷を受くる者は誰ぞ、赤目ある者は誰ぞ、往きて混和せたる酒を味ふる者なり、酒は赤く盃の中に泡だち滑かにくだる、汝これを見る勿れ、是は終に蛇の如く噬み蝮の如く刺すべし」等の中にある酒にして、特に「濃酒」「混和せたる酒」「盃の中に泡だつ酒」と呼ばる。パウロが肉の行の中に算へ

たる「酔酒」又は「酒に酔こと勿れ、之をなすは放蕩なり」と言ひし所のものは即ち此の種の酒なり。而して彼のカナの婚筵に於て、或は彼の晩餐禮設立の際に於て用ゐられたる葡萄酒の后者たることは論を俟たず。誰れかキリストはソロモンが禁ぜし所の酪酏すべき酒を造りて人々に與へ、或は后年パウロが戒めし所の放蕩なる「酔酒」者がカナの婚筵の席に多かりしことを想像し得んや。

イ箴廿〇一 口箴廿三〇廿九—卅二 ハ加五〇廿一 二弗五〇十八。

膏

雅五〇十四、十五に曰く「爾曹のうち誰れか病める者あるか、あらば教會の長老等を招くべし、彼等主の名によりて其人に膏をそぎ之が爲めに祈らん、それ信仰より出づる祈禱は病者を救ふべし、

神意を否定するが如く見ゆる聖句

主「これを起さん」と。此處に謂ふ所の膏は無論橄欖油なり。橄欖油に醫藥的効能あるや否やを知らず。假令ありとするも其が萬病に効能あるべき理由なし。而して此に「膏をそゝぎ」とあるは、單に二種の病者に限るにあらずして、有ゆる「病める者」に對してなり。故に其が醫藥的意味に於てそゝがるゝに非ずして、我等が謹んで守るべき命令の一として示されしものたるや明かなりとす。況んや「病める者を救ふ」は「信仰より出づる祈禱」なることを明記せるに於てをや。彼の十二の弟子等の二人づゝ遣はされし時にも彼等は「人々に悔改む可きことを宣べ傳へ、又た多くの惡鬼を逐出し、又た多くの病める者に膏をつけて醫し」たりき。

### 人の現在及び未來

人は多く人以外の事柄、たとへば天文とか、地理とか、歴史とか、經濟とか、動物とか、植物とか云ふ様な事に就ては大に研究するも、人自身に關する研究は寧ろ之を忽にするの傾きあり。實に奇怪千萬と謂ふ可し。偶々不安の念に驅られて、人とは如何なるものなるか、人は結局如何に成行くべきか等の問題を提起し、之が研究を企つるものありと雖も、大抵世の空論家の爲めに誤まられ、終に何の得る所なく、却て煩悶の淵に陥るの事實を見るは誠に歎はしき次第なり。

凡そ人に關する眞理を最も親切に教ゆるもの、未だ會て聖書の如きはあらず。誰にても聖書に就て之を學ばゞ、恰かも暗夜に光明を

得たるが如く、人の現在及び未来の状態を明かにし、随つて此の世に處するの道を知る可し。是れ茲に専ら聖書に基きて、少しく此の問題の研究を爲さんとする所以なり。

第一人は肉體と靈魂と相合して成れる者なり。故に基督は曰く「身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るゝ勿れ、唯なんぢの魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れよ」と。又た曰く「その靈には願ふなれど肉體よわきなり」と。パウロは曰く「爾曹身に於ても靈魂に於ても神の榮を顯はすべし」と。又た曰く「我儕が外なる人は壞るゝとも、内なる人は日々新なり」と。ヨハネは曰く「爾が靈魂の隆んなる如く、爾すべての事につきて隆んに、又た康強ならんことを我れねがふ」と。世の哲學者は如何なる臆説を立つるにもせよ、聖書の教ゆる所は以上の如く頗る明白なり。而して我等もし聖書の教

ゆる所を信ぜば決して誤まらるゝの恐れ無し。

第二肉體と靈魂とは必ず終に分離すべし。是れ即ち死なり。ヤコブの妻ラケル産に臨み、其の産重くしてベニヤミンを産みたる後直に死したりしが「彼れ死に臨み其の魂去らんとする時云々」と記せり。基督は或る富める人の譬喩中に於て曰く「無知なる者よ今夜なんぢの靈魂とらるゝこと有るべし」と。又た「イエス大聲に呼はり曰ひけるは、父よ我が靈を爾の手に託く、かく言ひて息絶ゆ」と。又たステパノは石を以て撃ち殺さるゝとき祈りて曰く「主イエスよ我が靈魂をうけたまへ」と。此等の事實は、死の際に於ける肉體と靈魂の分離を明示するものに非ずや。

第三肉體と靈魂と分離したる、即ち死したる後、世末大審判の時の状態は如何と云ふにパウロ曰く「爾曹罪を死ぬべき肉體に王

たらしめて云々と。然れども靈魂はペテロの言へるが如く「心の内の隠れたる人すなはち壞ることなき靈」なり。故にヨハンはバトモス島に於ける黙示の中に「曾て神の道の爲め、及び其の立てし證の爲めに殺されたる者等の靈魂あるを見たり」。而して悪人の靈魂は彼の紫袍と細布を着て日々奢り樂みたる富める人の如し、曰く「陰府にて痛苦をうけ、其の目をあげ、遙にアブラハムと其の懷にあるラザロを見て叫び曰ひけるは、父アブラハムよ我を憐みラザロを遣して其の指の尖を水にひたし、我が舌を冷さしめ給へ、我れ此の炎焔の中に苦めばなり、アブラハム曰ひけるは、子よ爾は生きたりし時に爾の福を受け、ラザロは其の苦を受けしを憶へ、今かれは慰められ爾は苦めらるゝなり」と。然れども救はれたる義人の靈魂は彼のラザロの如し。彼れ「死にたれば天の使たちによりてアブラハムの

懷にをくられ而して「慰められ」たり。基督は己れと共に十字架に釘けられし罪人の「主よ爾國に來らん時我を憶ひたまへ」と請へるに對して答へたまはく「誠に我れ爾に告げん、今日なんぢは我と共に樂園に在るべし」と。パウロは言へり「我儕の心つよし、最も欲ふ所は身を離れて主と偕に居らんこと也」と。又た曰く「我が願は世を遊りてキリストと偕に在らんこと也」と。即ち悪人の靈魂は大に苦まざるべからずと雖も、救はれたる義人の靈魂は實に幸福なる状態に在る可し。

第四一たび分離したる肉體と靈魂は、世末大審判の際に再び相合して復活すべし。十字架の上なるキリストの愈々息絶へんとするに當つてや、大聲に叫んで曰はく「父よ我が靈を爾の手に託く」と。斯くてキリストの靈は則ち父の許に歸り、其の屍はアリマタヤのヨ



セフの墓に葬られたり。而して三日目の早朝、マгдаラのマリヤ及びヤコブの母なるマリヤ等、香料を買ひとのへて墓に到りしに、墓は空虚にして屍を見ざりき。其の後程なくキリストは弟子等に顯はれ給ひたり。是れ彼の一たび父の許に歸りし靈は、墓の中なる屍に來りて相合し、茲に復活して實に「寢りたるもの」復活の首となり給ひし也。

凡そ人の死するや、救はれたる義人の靈魂は、天の使たちによりてアブラハムの懷すなはち樂園に送られ（路十六〇廿二、廿三〇四十三参照）救はれざる罪人の靈魂は陰府に陥りて苦しむ也（路十六〇廿三—廿五参照）

復活の際に於て「主と偕に在る」ところの靈魂は、即ち主と偕に來るべし。故にパウロは曰く「我儕の主イエスその聖徒と偕に來ら

んとき爾曹をして我儕の神なる父の前に潔くして責むべき所なからしめん事を」と。而して今まで塵に歸りて墓の中に在りし肉體は其の靈魂を迎へて茲に再び相合し、「壞つる者は壞ちざる者を衣、死ぬる者は死なざる者を衣」るなり。是れ即ちパウロが「彼は萬物を己に服はせうる能に由りて、我儕が卑しき體を化へて其の榮光の體に象らしむべし」と謂ひし所のもの也。彼れ又た曰く「死にし人の甦るも亦た此の如し、壞つる者にて播かれ壞ちざる者に甦へされ、尊からざる者にて播かれ榮ある者に甦へされ、弱きものにて播れ、強き者に甦へされ、血氣の體にて播かれ靈の體に甦へさるゝなり、血氣の體あり靈の體あり」と。猶ほ主に在る者の甦へる事に就ては約六〇卅九、四十、四十四、五十四、同十一〇廿四、撒前四〇十三—十七等を参照すべし。

救はれたる義人のみ復活するに非ずして、罪人も亦た復活すべきことは、聖書の明かに教ゆる所なり。キリスト宣はく「之を奇とする勿れ、そは墓に在る者みな其の聲を聞きて出る時來らんとすれば也、善事を爲しし者は生を得るに甦へり、悪事を爲しし者は罪を得るに甦へるべし」と。又太廿五〇卅一—四十六をも参照すべし。又黙一〇七に曰く「視よ彼は雲に乗りて來る、衆の目かれを見ん、彼を刺したる者も亦たこれを見るべし」と。ダニエルも預言して曰へり「また地の下に睡り居る者の中、衆多の老目を醒さん、その中永生を得る者あり、また耻辱を蒙りて限りなく羞る者あるべし」と。すべての人は世末に復活して大審判を経たる後十分の賞罰を受くべき者なり。キリスト宣はく「それ人の子は父の榮光を以てその使等と偕に來らん、其の時各々の行に由りて報ゆべし」と。パウロ曰く

「われら必ず皆なキリストの臺前に出で、善にもあれ、惡にもあれ、各々身に居りて爲しし所のことに循ひ其の報を受く」べしと。又た曰く「そは爾曹に患難を加ふる者には患難を以て報い、患難を受くる爾曹には我儕と偕に平和を得ることを以て報ゆるは神の公義なればなり、此の事は主イエス火焰の中にて其の能力の諸使と偕に天より顯はれん時にあり」と。

義人の報いらるべき場所は天なり。キリスト宣はく「我が爲めに人なんぢらを罵り、また迫害、いつはりて各様の惡言をいはん、其の時は爾曹福なり、喜び樂め、天に於て爾曹の報賞おほければ也」ど。パウロ曰く「爾曹がかく聖徒を愛するは、爾曹のために天に蒞へある所のもの、即ち爰に福音の真理の道の中にて聞きし所のものを望むが故なり」と。ペテロ曰く「讀むべきかな神われらの主イエ

ス、キリストの父、かれ其の大なる矜恤を以て我儕を再び生み、我儕をしてイエス、キリストの甦り給ひしとに由りて活ける望を得させ、亦た我儕の爲めに天に藏めある朽ちず汚れず衰へざる嗣業を得しめ給ふなり」と。而して其の天は實にキリストによりて義人の爲めに備へられたる所なり。即ちキリスト宣はく「我が父の家には第一宅あほし、然らずは我れ豫て爾曹に之を告ぐべきなり、我れ爾曹の爲めに所を備へに往く、若し往きて我れ爾曹の爲めに所を備へば、又た來りて爾曹を我に納くべし、我が居る所に爾曹をも居らしめんとて也」と。パウロ曰く「我儕これを知る、我儕が地にある幕屋もし壞れなば、神の賜ふ所の家天にあり、手にて造らざる窮りなく有つ所の屋なり」と。

罪人の報いらるべき場所は地獄なり。キリスト宣はく「我が友よ爾曹に告げん身を殺して後に何を爲し能はざる者を懼るゝ勿れ、我れ懼るべき者を曹爾に示さん、殺して後に地獄に投入るゝ權威を有てる者を懼れよ」と。又た宣はく「罰せらるべき者よ、我を離れて惡魔と其使者の爲めに備へたる熄へざる火に入れよ」と。而して其所に陥れる者の状態は實に慘憺たるべし。キリスト宣はく、「國の諸子は外の幽暗に逐出され、其處にて哀哭切齒すること有らん」と。又た宣はく「若しなんぢの一手なんぢを礙かさば、之を斷ち去れ、兩手ありて地獄すなはち滅えざる火に往かんよりは、殘缺にて永生に入るは爾の爲めに善きこと也、彼處に入るもの、蟲つさず火きえず」と。

罪人の受くべき刑罰には輕重の差あるべし。即ちキリスト宣はく「あゝ禍なる哉コラジンよ、噫禍なる哉ベツサイダよ曹爾の中に爲

し、異能をツロとシドンに爲し、ならば、彼等は早く麻をき、灰をかむりて悔改めしなるべし、我れ曹爾に告げん、審判の日にはツロとシドンの刑罰は爾曹よりも却て易からん」と。又た宣はく「噫なんぢら禍なるかな偽善なる學者とパリサイの人よ、そは爾曹やもめの家を呑み、いつはりて長き祈をなす、之に由りて爾曹最も重き審判を受くべければ也」と。又た宣はく「僕主人の心を知りながら預備せず、亦其の心に従はざる者は打たるゝこと多からん、知らずして事を爲し、者は打たるゝことも少なからん」と。パウロ曰く「まして神の子をふみつけ、みづから潔められし契約の血を尋常のものとなし、又た恩を施す靈を侮る者の受くべき其の罰の重きこといかにばかりと思ふや」と。

上來記する所によりて、人の現在及び未来の状態に關し、略ぼ明

かにすることを得たりと信ず。而して其の據る所は不確實なる人間の思想に非ず、悉く聖語に基くものなるが故に、之に由つて深く自ら反省する者は福なり。然れども彼のノアの時の人々の如く、千百の警告をも無頓着に聞き流し、洪水の來り悉く之を滅すまで知らざる者」は禍なる哉。嗚呼眞に禍なる哉。

イ太十〇廿八。

ロ太廿六〇四十一。

ハ哥前六〇廿。

ニ哥後四〇十六。

ホ約參二。

ヘ創三十五〇十八。

ト路十二〇二十。

チ路廿三〇四十六。

リ徒七〇五十九。

ヌ羅六〇十二。

ル彼前三〇四。

ナ黙六〇九。

ヲ路十六〇廿三—廿五

カ路十六〇廿二。

ヨ路廿三〇四十二。

ヌ哥後五〇八。

人の現在及び未来